



SUSTAINABLE WEEK

SUSTAINABLE WEEK SUPPORTS SDGs

はじめよう、僕らの未来デザイン 2017 年度 活動報告書

立命館大学 Sustainable Design Lab. / 立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

SUSTAINABLE WEEK 2017

主催 立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

企画 立命館大学 Sustainable Design Lab./Reco.lab

後援 滋賀県 / 草津市 / 近江八幡商工会議所 / 立命館地球環境委員会 / 立命館サステナビリティ学研究センター

参加協力団体

料理サークル meRci / エコライフデザインサークル Reco.lab / FB+1 / 飛行研究会ダンデライオン /

草津天文研究会 / color-free / 立命館大学理工学部環境システム工学科 /

立命館アコースティックギターサークル / アカペラサークル Song-genics / 立命館大学書道部 /

カラーガードサークル LUSTER / 立命館大学 BKC インキュベータ インターン生 23~27 期 /

ロボット技術研究会 (RRST) / STEP ~Science & Technology English Presentation~ /

難民支援・研究団体 PASTEL / watnow / IVUSA 京都 / 立命館大学新演劇研究会劇団月光斜 Team BKC /

EMH プロジェクト / Dive In Blue / 大川活用プロジェクト支援団体 haconiwa /

生命科学部自主ゼミ団体 Ritree(緑化プロジェクト) / 立命館大学国際平和ミュージアム / SOIL&SOUL

広報協力団体 立命館大学放送局 RBC

広報協力・ポスター制作 立命館大学新聞社

INDEX

はじめに

報告書発行にあたって	2
------------	---

Sustainable Week について

Sustainable Week の目的	2
Sustainable Week 開催の背景	3
実施企画と実行委員会について	4-8
学内での取り組みについて	4
実施企画について	5
SDGs の 17 個の目標達成に向けた階層図について	5
団体構成について	6
SDGs 階層チームについて	7, 8
コラム “Sustainable Week での出会いをきっかけに新たな活動を始めた学生たち”	8

参加団体活動について

BIOSPHERE グループ	
“水” から生活を考えよう	9
ZEH に住もう	10, 11
外来魚を喰らえ	12, 13
BKC Aquarium	14, 15
0 円食堂	16, 17
SOCIETY グループ	
満腹で幸せに！ ~cooking of meRci~	18, 19
0 円食堂	20, 21
Health Week ~ 週慣化して健康に ~	22, 23
空を感じよう ~ 熱気球搭乗体験 ~	24, 25
満天の星を体験しよう	26, 27
BKC- バルーンに気持ちを込めようキャンペーン	28, 29
再生可能エネルギー合同ライブ	30, 31
シェアアップ	32, 33
防災の秋	34, 35
ECONOMY グループ	
学生よ、大志をいだけ - 学べ、起業家精神 -	36, 37
Technology を体感しよう	38, 39
Sharing Basement Project	40, 41
Refugee Dining	42, 43
SOIL&SOUL PROJECT	44, 45
ゴミ箱アート	46
協賛企画について / 後援・協賛団体一覧	47
Sustainable Week with Dari K (協賛企業：Dari K 株式会社)	48, 49
滋賀県庁×立命館大学教職員×立命館大学生 合同 SDGs ワークショップ (協賛自治体：滋賀県)	50, 51
Sustainable Week プレイメント「立命館大学生と考える SDGs」(協賛自治体：草津市 / UDCBK)	52, 53
Sustainable Week 事後アンケート	54-56
Sustainable Week メディア掲載実績	56
SDGs 体験型イベント Sustainable Week を実施して 学校法人立命館へのお願い	57

社会実験事前調査事業

平成 29 年度 UDCBK 社会実験事前調査事業について	58
私たちの SDGs - 滋賀のミライを考える -	59-61
Let's Talk About the Future with SDGs	62-64
コラム “誰一人取り残さない SDGs カレー”	64
平成 29 年度 UDCBK 社会実験事前調査事業のまとめ	65

巻末

Sustainable Week 2017 企画マップ	66-67
-----------------------------	-------

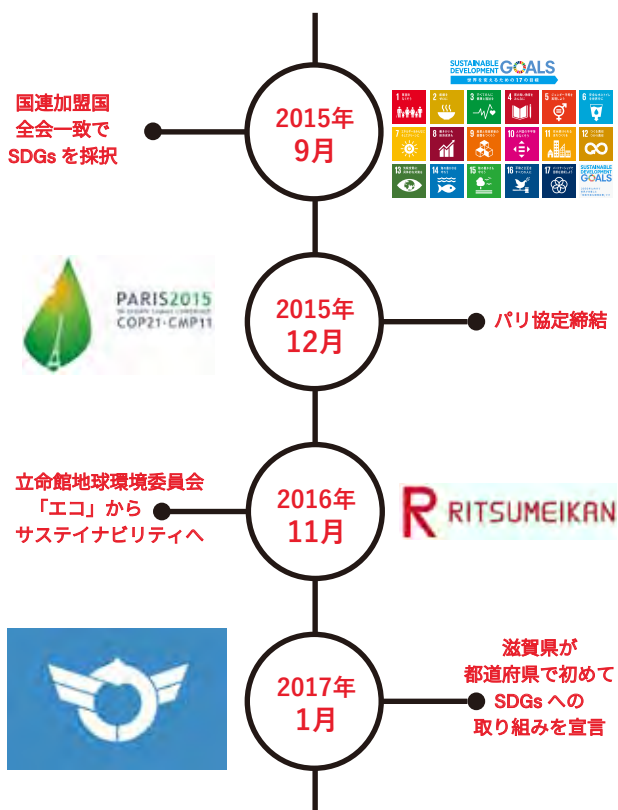
はじめに Sustainable Week 報告書作成にあたって

国連は、2015 年 9 月に開催された「国連持続可能な開発サミット」において、人間、地球および繁栄のための行動計画として、17 の目標と 169 のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs）」を掲げた。

近年、世界的に SDGs 達成に向けた取り組みが行われており、日本国内でも SDGs に沿った事業が増えてきている。私たちは、学内の学生サークルや学生団体が自身の問題意識に対し、自身で解決策を考え実践する機会を作る必要があり、その学生オリジナルな視点が社会に対して新しいインパクトを与えるのではないかと考えた。そこで学生団体の組織の枠を超えた連携で、お互いの強みを活かし合う、Sustainable Week を実施した。

そうした SDGs 達成に向けたキャンパスモデルづくりは未だ行われていない企画であり、次世代の“社会の在り方”を大学内外に考えさせるきっかけとなると考えた。

本報告書では、2017 年 10 月 1 日（日）～10 月 6 日（金）に開催した Sustainable Week の成果をまとめた。



Sustainable Week について Sustainable Week の目的

今年度実施した「Sustainable Week」の主な目的は次の 3 点である。

- ① 立命館大学の学生団体から社会課題解決に向けた取り組みおよび学内外に向けた SDGs の啓発
- ② 時代、社会、人の変化に対応できるサステイナブルキャンパスの実現
- ③ 学生が自分自身、所属組織の持続可能について深く考え、自己表現する機会の提供

Sustainable Week について

Sustainable Week 開催の背景

2015年9月、全国連加盟国（193カ国）は、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」を全会一致で採択した。この文書で示された具体的行動指針が「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」である。SDGsは、持続可能な地球を目指すための開発目標であり、「生態系の保全」「社会インフラの整備」「貧困と経済」などがキーワードとして盛り込まれている。これは、2030年に向けた人類共通のビジョンであり、先進国と新興国、発展途上国による国際的な連帯が求められている。SDGsは、誰もが尊厳があり平等に機会が得られるような人生を送ることができるよう、政府、企業および市民社会に対して行動を要請している。また、SDGsは、地球規模の公的なしは民間の投資の流れを、SDGsが代表する課題の方向に転換することを狙いとしている。つまり、これから先、欧米を始めとする外資系企業は、SDGsをビジネスにおける1つの指標として、積極的に取り組みを始めている。一方で、カナダの出版社Corporate Knights社の調査によると、「世界で最も持続可能性のある企業100社」において、日本はたったの4社と、事業としてのSDGsの取り組みにおくれを取っていることが分かる。その原因として、SDGsの認識の低さが挙げられる。一般社団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン（GCNJ）および公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）が2016年9月に実施した日本企業のSDGsの取り組み実態を取りまとめた調査によると、経営層の認知度は28%、中間管理職では5%だったという結果もある。また、Sustainable Week実行委員会も今回、Sustainable Weekを実施するにあたり立命館大学びわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）の学生対象に行ったアンケートでもSDGsを認識している学生は15%程度であった。つまり、日本でのSDGsへの理解は不十分であり、SDGsを指標に行動しているとは到底言えない状況であると言える。



国連が制定したSDGsロゴ

このような状況で、2017年1月にBKCの所在する滋賀県は日本の都道府県で初めてSDGsに参画を表明した。私たち立命館大学生は、このような世の中の流れをいち早く汲み取り、行動に移した。そこで、発案した企画は、BKCを“小さな地球”と見立て、全世界が取り組む共通のゴールであるSDGsを1つの指標をして、BKC所属の学生団体が主体的に課題解決を行う企画である。そこでは、各学生団体が今まで培ってきた技術や強みを生かした活動をSDGsの17個のゴールと照らし合わせながら実際に行動することにより、学生の柔軟な発想力と大胆な行動力から誰も見たことのないSDGsの解決モデルの提案を目指す。BKC所属の221名の学生向けに行ったアンケート結果によると、「自分の専門分野と異なる専門性を持つ学生同士で連携した活動を行ってみたい」と答えた学生は90%に上った。また、地球温暖化や貧困の問題に代表されるような社会問題に関心のある学生は70%を占めることにに対し、それを考える機会や実践の場を実際に活用している学生は全体の20%に留まることが分かった。その理由として「機会がないから」と答えた学生が全体の30%を占めた。以上のことから、今回、実施したSustainable Weekでは、今まで出会うことのなかった学生団体が1つのゴールを達成する過程で、繋がり、活動を共にすることで、BKCの学生が望むような社会課題に真剣に取り組む自己表現の場を提供したいと考えた。

最後に、今回Sustainable Weekの実施にあたって、BKCにおける「持続可能」とは何かという問いに対し、参加をしている学生自身、所属する団体、さらには、その他の一般の学生、地域、行政、企業など多くの人や組織を巻き込みながら、1つのモデルという形で参加団体がBKCから行政や大学、企業へ提言を行う。この企画を5年、10年と継続していくことによって、2030年のSDGsという世界規模の達成目標をSustainable Weekはローカルなレベルで考え、行動をとるにしていけることになる。その結果として、私たちはBKCが時代、社会、人の変化に対応できるキャンパスになることを実現したいと考えている。

Sustainable Week について 実施企画と実行委員会について

学内での取り組みについて

今年度はBKCにて、Sustainable Week を実行した。昼休み時に一般大学生がよく利用し、集まりやすいセントラルアーク・セントラルサーカスを中心に多数の活動を企画した。これにより、一つの場所で様々な企画に参加できるというメリットを学生側が受容することができた。

一方、学生の流れがあまりない場所でのイベントに関しては、SDGsの目標ごとのつながりを意識した形でのスタンブラリーを実行することにより、人々の流動性を図った。また、各企画の日時ごとの実施概要に関しては、右下図のタイムテーブルに示されているように、学生ができるだけ参加しやすい1限目前・昼休みからその後・一般講義最終時限に企画を実施することによって、学生の参加率向上を目指した。この企画実施時間に対する取り組みは、実際に学生自身が企画・運営しているイベントならではの考えであり、参加者からの声としても自分たちが参加できる時間帯に活動が行われているのは参加しやすく、良かったとの声が聞けた。

10月1日(日)に開会式、滋賀県庁職員・立命館大学職員・Sustainable Week 実行委員学生によるSDGsワークショップ、地域住民向けの企画を実施し、地域住民や地域団体、行政や大学も巻き込んだ取り組みを実施した。

また、立命館大学が打ち出している地域と大学との交流を活性化させる「フロントゾーン」を活用すべく、BKCスポーツ健康モنزにて周辺地域の方々や子供に向けたイベントの開催も行い、地域の方々から評判を得た。

大学内での開催に当たり、各企画団体は立命館大学職員の方々や施設関係者の方々の協力を得て、企画実施の約1年ほど前から順次、当日に向けた場所の選定・交渉、備品使用の手続きなどの準備作業を進め、円滑に活動を行うことができた。このような学生団体と大学との関係性向上もこのSustainable Weekの持つ学内で実施する意義の一つであると考えられる。



パンフレット掲載学内マップ



Sustainable Week 当日タイムテーブル

実施企画について

立命館大学に所属する 27 の学生団体、約 700 名が企画運営に携わった。開催場所の BKC のみならず、衣笠キャンパスからの参加団体もあった。学生自身が自ら当事者となって SDGs の 17 の目標を解決するべく、実現に向けて 21 の企画を行った。企画内容については各団体が SDGs の目標達成のために、SDGs を解釈し、それぞれの団体の個性を活かしながら企画に取り組んだ。各団体が取り組んだ企画の詳細は本報告書の「参加団体活動について (P.9~)」を読んでいたきたい。そこでは、今までに活動してきた内容が SDGs の目標に一致している団体以外にも、新たに SDGs の掲げる目標に関心を持ち、新たな活動の一環として、Sustainable Week に参加し活動を行ってきた団体もある。このように環境に対して興味を持っている学生のみならず様々な立場の学生が共同して活動を行ってきた。

なお、実施期間中の企画全体での参加者は 6 日間で 2,300 名にのぼった。



Sustainable Week 中に行われた全企画

SDGs の 17 個の目標達成に向けた階層図について

持続可能性や SDGs という概念を理解するためには、Sustainable Week の参加者になるべく多くの企画に参加してもらうこと、企画実施団体間・企画間の相互認識や連携を生み出すことが重要であると考えた。そこで、ストックホルム・レジリエンス・センター所長を務める環境学者ヨハン・ロックストローム氏*の提唱する以下の階層に従い、17 の SDGs 達成目標とそれぞれの目標を担当する学生企画団体を地球環境 (BIOSPHERE)、社会 (SOCIETY)、経済 (ECONOMY) の 3 つのグループに分けた。この階層図は、土台となる階層の達成目標を満たさなければ、上段に位置する階層の達成目標は満たされないということを表現している。



by Stockholm Resilience Centre

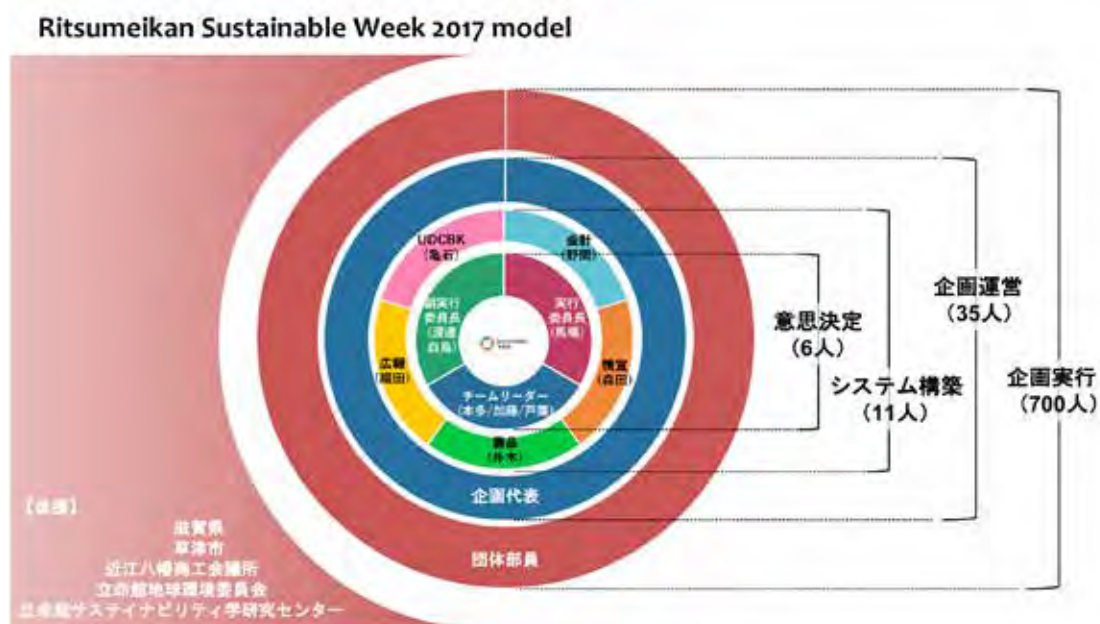
チームによる SDGs の階層的解釈

私たちは、この階層図を使用することにより、同階層ごとに団体間・企画間の連帯が生まれるだけでなく、縦方向の階層と自団体の担当する達成目標にも新たなつながりを認識できると考えた。

*ヨハン・ロックストローム (Johan Rockström)

ストックホルム大学の環境科学 (水資源、地球の持続可能性) の教授。2009 年に、20 人以上の様々な分野の研究者を率いて、人類が地球システムに与えている圧力の限界値についての枠組みを示した論文「プラネタリー・バウンダリー (地球の限界)」を発表。いくつかの政府や国際機関、ビジネス界のアドバイザーとしても活躍、数多くの科学論文や一般向けの著書を執筆している。

団体構成について



実行委員会メンバーシステム図

◆ システム構築メンバー

◆ 企画運営メンバー

SDGs 階層チームについて

Sustainable Week では前述の環境学者ヨハン・ロックストローム氏の提唱する階層に従い、17のSDGs達成目標とそれぞれの目標を担当する学生企画団体を地球環境(BIOSPHERE)、社会(SOCIETY)、経済(ECONOMY)の3つのグループに分けた。各グループは、そのSDGs達成目標が持つ社会的意義を理解し、その連鎖性をどのようにして企画を通じて参加者に理解してもらえるかを確認した。

また、当グループ活動は企画実施時のみのグループでなく、一つの行動単位として存在することによって、前ページで示した団体構成のうちのグループリーダーを介した Sustainable Week 実行委員会としての統率を行うためにも役立っている。

◆ 地球環境 (BIOSPHERE) グループ

現在の自然社会の問題点を知ってもらう

持続可能な開発を行う人々の環境を作り上げる。

このグループは、SDGsが達成すべき目標の中でも最も基礎的な目標群となっており、人々が生活する上で必要不可欠な目標を提示している。SDGsの「誰一人として取り残さない」といったスローガンを実践するにあたり、特徴的なゼロ目標を含む目標6や、自然環境に対する人間のアプローチの方法を検討すべきといった目標13, 14, 15がこのグループに属している。安全な水が提供できない地域では、仕方なしに汚染された水を摂取・使用し、感染症の媒介する状態が引き起こされる。人々の利己的な開発進行により、近年多く発生するような異常気象が引き起こされる。無尽蔵ではないとわかっている水産資源や陸の資源の、配慮のない使用・廃棄による環境破壊、並びに資源不足が引き起こされる。このような生活環境、そして地球環境に対する問題を解決し、人々が健やかに生きることのできる世の中にするからこそが、持続可能な開発を行う足がかりになると考え、我々は行動した。



BIOSPHERE グループ企画

◆ 社会 (SOCIETY) グループ

知らない世界へ飛び込もう、楽しみ方は無限大！

SDGsのスローガンである「誰一人として取り残さない」を実現する社会、ダイバーシティを構築するためには、人の多様な在り方について考えることが必要である。このSOCIETYグループでは社会や教育という観点において、その人との関わりが最も密接なパートである。このSustainable Weekとしても、学生だけでなく、地域の方や子どもたちといった沢山の人のつながりが存在している。本グループは、3つのグループの中で最も参加メンバーの多く、その特徴を活かし、学生だからこそ見出せる面白さを最大限に活かし、地域の方や子どもたちがより興味・関心を持てる内容を意識した。そして、この面白さを軸にして、多くの人に知らない世界を知ってもらい、お互いを尊重し合える社会の実現を目指した。



SOCIETY グループ企画

◆ 経済 (ECONOMY) グループ

国際産業の発展と格差解消の両立を考える

このグループは、持続可能な産業発展および経済成長に関する目標 8, 9, 12 と、格差の是正を唱える目標 10 の大きく 2 つの要素から成り立っている。1 つ目の要素では、まず目標 9 にて、経済成長の基盤となる産業と科学技術の向上とそれらを国際的に発信する重要性を認知してほしいと考えた。そして、目標 12 で、使用者がインフラのメンテナンスに積極的に関わっていくことをはじめとした、持続可能な生産消費形態を考えた。さらに、目標 8 で、イノベーションを起こす人材の育成に貢献したいと考えた。一方で、SDGs の「誰一人として取り残さない」というスローガンにもあるように、“人々を経済成長から置き去りにしてはいけない”として、2 つ目の要素の目標 10 にて、人々の中の平等が実現される社会の姿を考え、その社会に向けた行動を促した。



ECONOMY グループ企画

コラム

Sustainable Week での出会いをきっかけに 新たな活動を始めた学生たち



「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」にロボット技術研究会の代表として取り組んだ理工学部3年の森田崇文さん(写真右)と「14. 海の豊かさをまもろう」に haconiwa の企画代表として取り組んだ生命科学部2年の戸簾隼人さん(写真左)は Sustainable Week を通じて出会いました。立命館大学 Sustainable Week 実行委員会で、森田さんが情宣担当、戸簾さんが BIOSPHERE グループリーダーとして活動を共にする中で意気投合し、SDGs に関する新しい取り組みを始めました。現在、お二人は、子どもの自転車事故をテクノロジーで解決する「ANSHiN フレーキシシステム」の開発を行っています。立命館大学の研究室や草津市などの行政を巻き込みながら、実現に向けて熱い議論を交わしています。

参加団体活動について 各団体参加企画報告書一覧

BIOSPHERE グループ

"水" から生活を考えよう.....	9
ZEH に住もう.....	10, 11
外来魚を喰らえ.....	12, 13
BKC Aquarium.....	14, 15
0 円食堂.....	16, 17

SOCIETY グループ

満腹で幸せに！ ~cooking of meRci~.....	18, 19
0 円食堂.....	20, 21
Health Week ~ 週慣化して健幸に ~.....	22, 23
空を感じよう ~ 熱気球搭乗体験 ~.....	24, 25
満天の星を体験しよう.....	26, 27

BKC- バルーンに気持ちを込めようキャンペーン.....	28, 29
再生可能エネルギー合同ライブ.....	30, 31
シェアアップ.....	32, 33
防災の秋.....	34, 35

ECONOMY グループ

学生よ、大志をいだけ - 学べ、起業家精神 -.....	36, 37
Technology を体感しよう.....	38, 39
Sharing Basement Project.....	40, 41
Refugee Dining.....	42, 43
SOIL&SOUL PROJECT.....	44, 45
ゴミ箱アート.....	46



BIOSPHERE グループ 活動報告書

“水” から生活を考えよう

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

◆企画詳細

[1]	名称	“水” から生活を考えよう
[2]	主催	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会
[3]	実施場所	立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク
[4]	日時	2017 年 10 月 1 日（日）～ 2017 年 10 月 6 日（金）
[5]	企画内容	研究ポスター掲示 - 立命館大学理工学部環境システム工学科による水質研究ポスターの展示 企業紹介ポスター掲示 - 株式会社日吉の事業紹介

◆企画結果

- ・企画展示を行い、Sustainable Week 来場者や大学生の水環境に関する関心が高まると共に、地元で実際に環境に対して貢献をしている企業について、様々な目線からの意見が飛び交っていた。
- ・参加人数については企画展示かつ、入場の概念を設定せずにオープンスペースで行っていたため、定量化は困難であった。



企画風景



ZEH に住もう

EMH プロジェクト

◆企画背景

現在、地球温暖化が世界的に深刻な問題となっている。その原因と推測されている CO₂ は、エネルギーをつくるために化石燃料を燃やすことで多量に排出される。日本国内のエネルギー消費は、住宅・ビルが約 3 割を占めており、住宅の省エネルギー化が課題となっている。その解決策の一つとして、1 年間で消費する住宅のエネルギー量が正味(ネット)で概ねゼロ以下となる「ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス」(以下「ZEH」と称する)を普及させる政策が施行されている。平成 26 年 4 月の閣議決定において「エネルギー基本計画」が制定され、2020 年までに標準的な新築住宅で、2030 年までに新築住宅の平均で ZEH の実現を目指すという政策目標が設定された。ZEH を普及させることは気候変動への具体的な対策の一つとして考えられるが、ZEH の世間一般の認知度は低く、ZEH を購入したい消費者が少ないのが現状であり、普及させるためには消費者の省エネルギー意識を向上させることが必要である。また、ZEH が広く国内に普及していくためには、単純な省エネルギー化を図るのではなく、居住者が快適かつ健康に暮らせる住宅を提案しなければならない。このような課題背景がある中で、我々は大学と企業が共同して ZEH のモデルハウスを建設する事業に携わっている。2015 年度は「エネルギーと水の両方で高度に自立した住宅」を提案し、横浜市みなとみらいにモデルハウスを建設した。普通、ZEH の考え方には「水」は含まれないが、人間が健康に暮らすためには必ず考えなければならない要素である。また、世界には水のインフラが整っていない、日常生活ですらまならない地域が多数存在している。水の cascade 利用と循環再生利用という家庭内で水を繰り返し使い、上水使用量を大幅に削減する方法を提案し、上記のようなオフグリッドの地域にも展開できる住宅を考えた。我々は未来の住宅の消費者となる学生に向けて ZEH の紹介を行い一般大学生などの来場者に省エネに対する意識をもってもらいたいと思っている。また、ZEH のビル版である ZEB の理解や、立命館大学でのサステナブルキャンパス実現に向けた取り組みなどへの理解にも繋げていく。

本企画は、未来の住宅の消費者となる学生に ZEH について知ってもらい、省エネに対する意識をもってもらうことを目的とする。気候変動への対策として ZEH を普及させるため、世間の ZEH の認知度を向上させたい。Sustainable Week では、エネマネハウス 2015 の後継モデルが学内に設置されているため、その実験棟の紹介や住宅に採用する設備技術の紹介を行った。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|---|
| [1] | 名称 | ZEH に住もう |
| [2] | 主催 | EMH プロジェクト |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 環境系研究棟 Tricea 裏 次世代住宅実証実験棟 |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 5 日(木)～2017 年 10 月 6 日(金)
10 月 5 日(木) 13:00～16:00 / 10 月 6 日(金) 13:00～16:00 |
| [5] | 企画内容 | 「回転する住宅見学」
実際に回転し窓の方位が変わる住宅(次世代住宅実証実験棟)の中に入ってもらい、中に設置した ZEH の模型や ZEH に関する各種設備技術のポスターを展示し見学してもらった。学生や住民に向けて気候変動の対策としての ZEH の大切さを伝える。30 人/日の集客を目指し、実施前と実施後に ZEH の認知度や感想などのアンケート調査を行い、来場者の ZEH の認知度・省エネ意識向上の効果を測った。 |

◆企画結果

■参加人数 15人/1日（2日目は雨天中止）

■アンケート 見学者を対象としたアンケートを実施

<ZEH（net Zero Energy House）に関するアンケート調査内容>

- ・ Sustainable Week より以前に ZEH の意味を知っていましたか？
- ・ 今回の展示を見学して、ZEH に住みたいと思いましたか？ 等

<アンケート結果>

- ・ 15人中10人がZEHを全く知らなかった。
- ・ 15人中11人がZEHに住みたいと回答した。

■考察

建築の学生以外の回答者全員がZEHについて全く知らなかったため、ZEHの認知度はまだまだ低いものだと感じた。来場者にはZEHについて興味深く耳を傾けてくれたので、今回の企画をやってよかった。しかし、来場者自体が少なかったため、ZEHを多くの学生に広げることができなかったのが反省点として挙げられる。

[1] 参加者への効果

・ ZEH という単語を知らなかった学生にも ZEH の意味を伝えることができ、ZEH を知った学生には今後住宅購入の際の事前知識になった

[2] 主催団体への効果

・ 建築の専門ではない来場者に説明することで、わかりやすい説明の仕方が身についた。

[3] 協力者への効果

・ 協力者は今回いなかった

・ 大学側への効果としては、エネマネハウスの取り組みを Sustainable Week で発信したことで、学外に向けた建築学科の広報の一つになった。

◆今後の目標

・ 集客が少なくイベントの効果が曖昧だったため、開催場所を変えることや、他の団体と共同してイベントを行うことが必要

MEMO



外来魚を喰らえ

大川活用プロジェクト支援団体 haconiwa

◆企画背景

現在、琵琶湖では肉食性外来魚が地域生物群集に侵入することで、在来魚類と外来魚との直接的・間接的な干渉が行われる。これで地域の生物多様性が損傷を受けることで、やがては在来資源の持続的有効利用が破綻してしまう事態が憂慮されている。として琵琶湖の固有種であり重要な漁獲対象種であるホンモロコを挙げると、1995年までは毎年150-350tの漁獲量が記録されていたが、それ以降急減し2004年には5tにまで減少したと示している。このような外来魚による在来魚類の持続可能性に対し、滋賀県では啓蒙活動や駆除、漁獲などにより、外来魚撲滅による在来種による生態系維持を目指した駆除に努めてきた。その結果、外来魚の絶対値は縮小傾向にある。実際、滋賀県水産課事業によると、外来魚の駆除量はピーク時である2007年の534tから、2015年では158tと減少傾向にあることも明らかである。そして、駆除された外来魚の大多数は「堆肥用魚粉」として利用されている。これにより、外来魚を資源として利用しつつも、駆除を行うことで在来魚類の復活・再興が徐々に進みつつある。我々はこの「外来魚を『堆肥用魚粉』として利用する」処理に対し、在来魚類と同じ魚であるにもかかわらず外来魚は食品としての意識が少なく、個人での処理・駆除が行いにくいという問題点があると考えた。実際、守山の漁師である戸田直弘さんと福井県立小浜水産高等学校、近畿大学が協力した「災害発生時の備蓄食料のために外来魚を調理した缶詰作成し、提供を行う」という試みでは、提供先である自衛隊から「駆除したものを食べさせるとは何事だ」と一蹴されてしまった。つまり、現状では基本的に外来魚は「他人に駆除してもらうもの」であり、自身が駆除すべきものとしての意識は薄い。そこで我々は外来魚の各個人の駆除方法の一つとして、外来魚の食品利用の価値や方法を消費者に提言し、税金に依存することのない各個人ができる外来魚駆除方法を周知する活動を行う。

本企画はSDGsにおける「14: 海の豊かさを守ろう」について、外来魚を撲滅させ、琵琶湖における旧来の生態系・資源維持を支持することで目標を達成する。そのために、外来魚の新たな駆除方法を見出し、その利用・ノウハウを現状より多くの方に周知することを、滋賀県に提案することで、個人による外来魚駆除処理のモデルケース提言を行うとともに、在来湖魚の魅力や認知度向上を行う活動をした。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | 外来魚を喰らえ |
| [2] | 主催 | 大川活用プロジェクト支援団体 haconiwa |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク ピロティ |
| [4] | 日時 | 2017年10月5日(木) 11:00～15:00 / 10月6日(金) 11:00～15:00 |
| [5] | 企画内容 | <p>「外来魚を喰らえ」</p> <p>外来魚をフライ調理し、提供を行う。また、食事後にアンケートを実施し、食材として見たときの外来魚の利点や感想を収集した。</p> <p>「資源の宝庫『琵琶湖』を知ろう」</p> <p>展示ブース。琵琶湖が持つ水産資源や、その価値についてポスターや動画を用い、知識として学生に周知した。ポスターには「琵琶湖漁師の生の声」や「琵琶湖で釣った外来魚レシピ」などを展示した。動画では、「がんばれ！琵琶湖の漁師たち」というDVDを放映した。</p> |
| [6] | 協賛先 | 守山市 / 守山漁業組合 |

◆企画結果

■参加人数 約 125 人 /2 日

■アンケート 外来魚調理品を食べた方を対象とした外来魚と在来魚に関するアンケートを実施 (82 名)
外来魚問題について、問題とを感じる人は 45 人。全体の約半数は問題意識はある模様
在来種について、食べたことがある人は 22 人と全体の 25%、そのうえ約 50% の人たちはそもそも在来種を売っているところを見たことがないと解答。外来魚の味に関するポジティブな意見は 8 割以上。

■考察

下処理をきちんと行うことで、食品としての利用は十分にできることの証明ができた。また、在来魚の認知がなかなかされていない現状をみると、まずは在来湖魚を保全するべきという意識を持つために、湖魚自体の認知活動や食体験を行うべきである。

[1] 参加者への効果

・外来魚の調理法などを知ること、釣りなどを利用した駆除への関心が高まる。無料で食品を得ることができる。滋賀県における問題を考えることで、地元に対する考え方の変化が期待される。

[2] 主催団体への効果

・団体の宣伝、地域のみならず、大学全体を巻き込むことができる。滋賀県とのつながりができ、新たな活動の場を広げられる可能性を孕んでいる。

[3] 協力者への効果

・外来種が駆除対象としてだけでなく、食品として使えることを伝える機会になる。また、現状行っている活動の対外的なアピールを行える機会となる。

・外来種に関する学生の考え方を知ることができるほか、在来種などの湖魚についての知識を広げることができる。

◆今後の目標

・協力者の連絡がつかなくなり、本番当日に食材提供が間に合わなかった。

→一人に的を絞りこんで、協力を仰ぐのではなく、幾つかの団体や個人に協力要請を行い、リスクヘッジを行うべきであった。必要性があった。

・少人数で食して、一気に食品がなくなってしまう場合があった

→一人一つと言ってはいるものの、その制限を無視する参加者の対応を事前に行うべきであった。

MEMO



BKC Aquarium

Dive In Blue

◆企画背景

「海ごみ」というものを皆さんはご存じだろうか。海ごみとは、海岸に打ち上げられた「漂着ごみ」、海面や海中を流れにのって漂っている「漂流ごみ」、海底に沈下して堆積した「海底ごみ」、これらを合わせたもののことである。海ごみは、陸上及び海上での物の不注意な取扱いや廃棄（投棄）、あるいは大雨等によって意図せずに水に流されたものであり、風や海水の流れの影響を受け、海面や海中を漂い、重いものは海底へと沈み、一部が海岸へと流れ着いているものと考えられる。もちろん、その海岸において捨てられたものもあるだろう。海ごみは、発生した地点から遠くに運ばれ、広い範囲に汚染が拡がるのが懸念されている。また、多種多様なごみには、とりわけ、ペットボトルや食品容器などのプラスチック製品は自然界での分解が困難なため、半永久的に環境中に残ってしまうことから、海洋環境や生物・生態系への影響が大きいものと懸念されている。実際に、海ごみの影響を受けて、レジ袋を飲み込んで死亡したウミガメや胃にプラスチックシートが詰まって死んでしまったイルカなど、人工のごみとエサの区別ができずに、間違えてプラスチックを飲み込んでしまう例、好奇心でごみに近寄ったり、ごみの陰に集まる魚を食べようと近づき、ごみが体の一部にひっかかったりする例など、海ごみの影響を受けた生物の死亡例は多数存在する。私たちは、なぜそのように海洋環境や生物・生態系への影響があるのにも関わらず、人は海ごみを出してしまうのかということに問題意識を抱いている。私たちは、こうした海ごみを少しでも減らし、海の生態系を守るために年に1回、海辺の清掃活動を継続して行っている。しかし海ごみの問題は依然として減らない。私たちは、その原因は一般の人たちが海洋生物たちと関わるのが少ないためであると考えた。その結果として、海に住んでいる様々な生物やきれいな環境を知らないからではないかと考えた。そのために、私たちは海の豊かな生物たちを知ってもらうためにプロジェクターを使用し、海のきれいさ、海の生物の魅力とともに海ごみの問題を伝え、私たちが海洋生物に与えている影響について考える機会を提供する。

本企画ではSDGsにおける「14：海の豊かさを守ろう」について、プロジェクターを利用して、学生・地域の方に向け、海洋生物や海ごみの映像を流すことにより、海洋環境や生物・生態系の豊かさ、又魅力を学生に理解してもらうとともに海ごみが海洋環境や生物・生態系に与える影響を理解してもらい、身近なごみのポイ捨てなどを減らすように心がけてもらった。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|---|
| [1] | 名称 | BKC Aquarium |
| [2] | 主催 | Dive In Blue |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク2F ラウンジ |
| [4] | 日時 | 2017年10月1日（日） 15:00～16:30 |
| [5] | 企画内容 | 「BKC Aquarium」
草津天文研究会が作成したプラネタリウムを使用して、実際にダイビング時に撮影した。映像を上映サンゴなどの海洋環境、ジンベイザメやウミガメ、マンタなどの生物・生態系の豊かさ、魅力を理解してもらうことに加え、海ごみの現状を放映した。
この企画では、草津天文研究会が同イベント内で作成したプラネタリウムで、360°の新感覚の映像を上映した。 |

◆企画結果

- 参加人数 40人 /1日
- アンケート アンケート - 企画に参加してくれた方を対象としたアンケートを実施
ダイビングに興味を持った -98%
海ごみの原因であるポイ捨てをしないようにしようと思った -100%

■考察

- [1] 参加者への効果
 - ・海の魅力、又海ごみへの知識を持ってもらえた。
- [2] 主催団体への効果
 - ・ダイビングへの興味、又海ごみについて知ってもらえた。
- [3] 協力者への効果
 - ・大学内施設の有効活用について知ってもらえた。



◆今後の目標

- ・動画の調整が不十分なところがあり、イベントに参加してくれた人に迷惑をかけた。
→協力した草津天文研究会との連絡ミスによって発生したため、事前に何度か確認を行うべきであった。
- ・これからも海ごみについて知ってってもらえるようにアクションを起こして行くつもりである。

MEMO



0 円食堂

Ritree(緑化プロジェクト)

◆企画背景

立命館大学びわこ・くさつキャンパス(以下、BKC)には、たくさんの木々が植えられている。しかし、その木々の多くは生育が不良であることに悩まされている。事実、クインスタジアムを取り囲む桜は、63 本中 12 本がキノコやシロアリに侵され、春になっても開花しない。これは、久保教授の研究結果によるものである。また、視野に入る緑量なども他大学(同志社、京都大学)と比較して格段に少ない。

このように、私たちの通っている BKC の木は弱っているものである。しかし、そのことを理解している BKC の学生は少ないと考える。その理由として、以下の 2 点が挙げられる。1 つ目は私たちが他大学の樹木と本学の木そのものを比べたことがないからであり、2 つ目は木自体に関心を持っている人が少ないからであると考えている。

私たちは、SDGs「15: 陸の豊かさを守ろう」を BKC 内の樹木の健康を守ることでであると解釈した。この解釈のもと、BKC の樹木を豊かにすることを目的として活動を行いたいと思う。現在 Ritree は、不健康になっている木を健康にすることを目的として、活動を進めている。この目的を達成させる手段として SOFIX 土壌改良技術を採用している。今回 Sustainable Week を契機に、より一層 Ritree の活動を邁進させるために、本企画を通して BKC 学生の樹木に対する事前意識調査から始める。そして、この企画では、BKC の樹木状況等を理解してもらい。最後に、事後意識調査を行う。以上により、学生の BKC 内の樹木に関する意識変化を調べる予定である。

本企画では SDGs における「15: 陸の豊かさを守ろう」について、学生に BKC の樹木の現状と SOFIX 土壌改良技術を認知してもらう。そして、学生に BKC の樹木が危機的な状況に瀕しているということの認識と SOFIX 土壌改良技術の必要性についての意識改革を行うことで目標を達成する。そのために、Sustainable Week 開催前と終了後にアンケート調査を行う。またその結果を立命館大学に報告することによって、早急な樹木管理を提言した。

◆企画詳細

[1]	名称	0 円食堂
[2]	主催	生命科学部自主ゼミ団体 Ritree (緑化プロジェクト) 立命館大学登録団体エコライフデザインサークル Reco.lab
[3]	実施場所	立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク 1 階
[4]	日時	2017 年 10 月 2 日 (月) 13:00 ~ 17:00/2017 年 10 月 3 日 (火) 13:00 ~ 17:00
[5]	企画内容	「ほうれん草のおひたし」 Ritree で育てた SOFIX ほうれん草をおひたしにして、提供した。お皿には丼ペリを使用し、エコに努めた。 事前アンケートと事後アンケートを実施 「Ritree の紹介ムービー」 ムービーの内容 :BKC の樹木の実態についての説明とそれに対する Ritree の活動内容について放映。 「Sustainable Week T シャツ」 Sustainable Week 期間中の共通ユニフォームの作成

◆企画結果

- 参加人数 120 人 /1 日目、90 人 /2 日目
- アンケート Sustainable Week 事前アンケート BKC 生・一般参加者を対象としたアンケートを実施
- 考察

[1] 参加者への効果

- ・立命館の樹木に対する意識が、向上した。(アンケート結果により)
- Sustainable Week 以前は、約 2 割の人が BKC の木について関心がなかった。
- Sustainable Week 以後は、BKC の木に関心が無い人は約 16% に、関心が全くない人は約 10% に減少した。
- ・大学生協が利用している再利用可能な食品用の皿である井ペリ使用により、ごみの分別に関する意識が向上した。

[2] 主催団体への効果

- ・Ritree メンバー内で活動に関する意欲が向上した
- ・SDGs を深く知ることができた
- ・自団体を相手にアピールする技術を身に着けることができた

[3] 協力者への効果

- ・大学側としては BKC 生に樹木に興味を持ってもらう方針が現在進行している。



◆今後の目標

- ・共同企画だったため、連携に努力を要した。
- 自団体と他団体で、やることを明確化させ各々が独自で企画準備をすることにしたところ、柔軟にかつ迅速に物事が進行した。
- ・企画実施時間がメンバーの授業時間と被っていた。

ほかの団体の人に代わりを務めてもらった。

立命館の木が脆弱であるということを、BKC 生に知らせ、自然に関心を持ってもらうことには今回成功した。また、今回の活動を通して、学外への活動拡大を求める声が大きかった。これらを踏まえてさらなる活動として Ritree は、立命館大学内の緑化はもちろん滋賀県の緑化、さらには近畿への緑化と活動範囲を広げていきたい。

MEMO



満腹で幸せに！ ~cooking of meRci~

料理サークル meRci

◆企画背景

日本の栄養摂取の現状において2つの課題が存在する。1つ目が日本人の20~29歳の野菜、食物繊維の摂取量が最も少ないということである。このことは、若者の野菜不足を示し、野菜不足によって生じる体調への(悪影響-便秘、貧血、苛立ちなど-)深刻な問題を引き起こしている。また、日本人の20~29歳の栄養摂取量は1995年から2014年までの間にエネルギー、たんぱく質の両方が減少傾向にある。2つ目が野菜の栄養価の減少である。この背景には栽培技術などが一体的に発展し、機械化、化学肥料化が著しく進展してきたところに特徴がある。これにより大量生産が可能となった。さらに、ハウス栽培や促成栽培などの技術により野菜が旬の時期とは関係なく大量生産が可能となり、年中出回るようになったことも影響している。このことは、旬の野菜の認識が下がる原因であると考えられる。また、旬の野菜とそれ以外の時期の野菜との栄養価の違いについては、特にビタミンCは変動が大きく、ほうれん草は2月が最大で73mg、7月が最低でわずか9mgとなり、またトマトは旬の7月が18mgと最大になり、1月は9mgで最低になる。旬の野菜は安くおいしいだけでなく、栄養価も高いことがわかる。このデータから旬の時期であれば野菜は収穫量だけでなく栄養価も高いことより、人が同じ量の野菜を摂取したとしても栄養摂取量に差が生じてしまうと言える。これらの栄養摂取量と栄養価の減少の2つの視点からわかることは、野菜摂取量の減少だけでなく栄養摂取量の減少が起こっているため、野菜を食べたとしても、必要な栄養が十分に取れていないことである。また、話を身近なところに移すと、立命館大学びわこ・くさつキャンパス(以下、BKC)において、BKC生の下宿生を対象に行った健康に対するアンケートによると、普段から健康を意識している学生が19.4%、健康を時々意識している学生が47.8%であるという結果から、健康に関心のある学生は下宿生全体の約70%であることが分かる。しかし、健康を意識しているにも関わらず、下宿生全体の91%が野菜不足を感じていることが分かった。以上のことから、BKCでの学生の健康に関する現状を世界、日本の現状として比較した際に、最も必要なこととして、旬などの季節を生かした野菜の摂取であると考えた。さらに旬の野菜を食べてもらうことで意識的に健康への関心を高めるきっかけになり、長らく続いている日本人の栄養不足という貧困をなくすこと、さらには、その現状に対する認識を持ってもらう。

本企画ではSDGsにおける「1: 貧困をなくそう」についてBKCの中での貧困を野菜、栄養不足としてとらえることで学生へ栄養を十分に取れる食べ物の提供を行う。また、この活動による料理提供を通じて食への関心、意識の改善を促すことで野菜、栄養不足の現状を改善することを目的とした。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | 満腹で幸せに！ ~cooking of meRci~ |
| [2] | 主催 | 料理サークル meRci |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内ユニオンスクエア1階食堂、ユニオンコンビニ前 |
| [4] | 日時 | 2017年10月4日(水) 11:30 ~ 13:00
2017年10月5日(木) 11:30 ~ 13:00 |
| [5] | 企画内容 | 「立命館大学芋の炊き込みご飯」
農家さんから提供していただいた野路芋(さつまいも)とレシピを生協に提供し食堂にて販売を行った。
ポスターによる企画の概要などの説明により学生の栄養不足の補填を目標とした。
150食/日で売り切れ次第終了。
「塩キャラメル黒みつきな粉立命館大学芋 on the 牛乳プリン」
農家さんから提供していただいた野路芋(さつまいも)とレシピを生協に提供し 生協前にて販売を行った。ポスターによる企画の概要などの説明による学生の栄養不足の補填を目標とし、並行してアンケートによる調査も行った。120食/日で売り切れ次第終了。 |
| [6] | 協賛先 | 立命館大学生協、スポーツ健康科学部 海老教授、海老研究室 |

◆企画結果

■参加人数 540 人 /2 日

■アンケート アンケート - 学生を対象としたアンケートを実施

アンケートの結果から料理の評価は非常に高かった。

野路芋の認知度に関しては知っている割合がやや高いという結果となった。

また、普段野菜を食べる割合が 30% と非常に高かった。

今回は、商品を買った人のみのアンケートであるため、不特定多数にアンケートをとって比較すべき。

■考察

[1] 参加者への効果

- ・生協前で行ったということもありたくさんの人に関心を持ってもらうことができた。
- ・認識としては食後のおやつとしてであるが栄養を摂ってもらうことができた。

[2] 主催団体への効果

- ・自団体のことを認知させることができた。
- ・地域貢献の活動のきっかけとなり、今後の活動の布石となった。
- ・生協から今後もコラボをする提案を頂けた。
- ・メンバーが調理活動のみだけでなく外部活動を経験する良いきっかけとなった。

[3] 協力者への効果

- ・生協：普段の学生とのコラボとは違った形の経験ができたとおっしゃっていた。
- ・海老研究室：普段であれば接点のないサークルとの交流が図れた。

サークルとして始めたばかりであった状態からのスタートで何をしていくことが大事なのかを認識できていなかったが、今回の企画を経て様々な方たちとの交流を持ち、その意識が変化した。具体的には、地域貢献を行う上で SDGs の持続可能な活動を行うという認識を抱き、自分たちのできる食をテーマとした地域への貢献をしっかりとしていこうと思う。

◆今後の目標

- ・SDGs の活動をしていたにもかかわらず販売することに手いっぱい自分たちの伝えなかったことが十分に伝えられなかった。
- ポスター以外にもメンバーによる説明や PV を流すなど伝える手段を考える
- ・メンバー内での SDGs に対する認識の差があった。
- しっかり勉強を行う期間を設ける

MEMO



0円食堂

エコライフデザインサークル Reco.lab

◆企画背景

世界の飢餓人口は7億9,500万人であり、9人に1人は飢餓に苦しんでいる。そのような状況の中で、大量消費国の代表である日本は、食品ロスの問題などが顕在化している。日本国内における年間の食品廃棄量は、国内の食料消費全体の約3割に当たる約2,800万トンである。このうち本来食べられたはずの食品は年間約500～800万トンである。この量は世界全体の食料援助量320万トンの約2倍の値である。また、人が1年間で消費する食料は約400kgであることから、1,500万人の1年分の食料になるということも言える。食料廃棄を水やエネルギー、労働力など、生産に使用される資源の観点で考えると、日本は、資源を無駄にしていると言える。「もったいない」という日本語が世界共通語として認知されているにも関わらず、大変もったいない現状そのものである。また、欧米では消費者1人当たり年間95～115kgが廃棄されているという。一方、農林水産省の発表では、日本の世帯で廃棄される「食品ロス」は年間1人当たり50kgとしている。この数字だけを比較すると、日本の食品ロスが少ないように思える。しかし、国際連合食料農業機関によると、本来、食料廃棄というものは食料の生産から貯蔵、流通加工、販売、消費に至るサプライチェーン全体を見るべきもののに対し、日本では生産地・生産者の廃棄（減耗量）は一切考慮されていない。その結果、必然的に日本の食品ロスが少なく見えるだけで、実際の廃棄量は実際の数値より多いはずである。

我々は、第一に生産の時点で実際にどの程度生産時に野菜・果物等が廃棄されているのかを知る必要があり、第二に減耗量を減らす工夫が必要だと考えた。そこで、我々は、立命館大学びわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）周辺の農家の減耗の実態を把握し、規格外の野菜でも流通できるようなシステムの構築の提案を行う。消費者の一員である学生に農家の減耗に対する意見や規格外の野菜のイメージについてアンケートを実施し、草津市等の行政に対して、農家の減耗を軽減するような消費システム構築について提言を行う。

本企画はSDGsにおける「2: 飢餓をゼロに」について、飢餓で苦しむ国と食料が余剰している国があり、余剰分を減らすことで飢餓の国に資源がまわると解釈した。そこで生産時に生じる食品ロスを減らすことで目標を達成する。そのために、行政に農家の減耗を消化する消費システムのモデルケースの提言を行った。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | 0円食堂 |
| [2] | 主催 | 立命館大学登録団体エコライフデザインサークル Reco.lab
生命科学部自主ゼミ団体 Ritree（緑化プロジェクト） |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス セントラルアーク1階 |
| [4] | 日時 | 2017年10月2日（月）13:00～16:00
2017年10月3日（火）13:00～16:00 |
| [5] | 企画内容 | 「0円カレー」
農家さんからいただいた材料（直売所での売れ残り野菜、古米）を用いてカレーを調理し、提供を行った。
一人前0円で提供を行い、100人/日以上提供を目指した。
「農家さんへのインタビュー」
ムービーの内容：規格外や価格調整によって捨てられる野菜の実態に関する農家さんのお話。
カレー提供と同時にアンケート調査を行い、学生の食品ロスへの意識に対する調査を行った。
「Ritreeとの連携」
学内栽培のほうれん草の提供、PV放映
「立命館生協学生委員会との連携」
テイクアウト丼容器 丼ペリ利用 |

◆企画結果

■参加人数 120 人 /1 日目、90 人 /2 日目

■アンケート 参加者 210 人を対象としたアンケートを実施

廃棄野菜の新たな利用方法を考えるために実施した。

食品ロスに関心のある学生は 70% 野菜を買う時に形を気にしている学生は 50%

形の悪い野菜が定価の 50% 以下なら買う学生は 45% 定価の 80% 以下なら買う学生は 85%

■考察

食品ロスに関心のある学生は多くても、野菜購入時は形を気にしてしまう学生もいる。形の悪い野菜でも、価格を下げれば買う学生が多いので、規格外の野菜でも販売できるシステムを構築すれば廃棄野菜を減らすことができるのではないかな。

[1] 参加者への効果

- ・食品ロスについて関心を持ってもらう
- ・無料で料理を提供することは、本企画に参加したいと思える印象を与え、イベント参加のハードルを下げることでできた。(Sustainable Week 実行委員会実施のアンケートより)。

[2] 主催団体への効果

- ・団体の宣伝
- ・学生に環境意識を持ってもらえた
- ・学内団体とのつながりを作ることができた (Ritree、生協学生委員会)

[3] 協力者への効果

- ・仰木の里へ棚田ボランティアに行く人の輪を広げることができた。(Reco.lab のメンバー、Ritree、職員さん)

◆今後の目標

- ・料理を提供するのに精一杯で、SDGs について、廃棄野菜の現状についてうまく学生に伝えられたかわからない。
→企画の内容について説明する人員が必要
- ・アンケートの目的がずれていた。→実行委員会が何を求めているのか、事前に確認する。
- ・企画をすることが目的になっていた。→食料提供という企画の性質上、仕方のないことでもある。準備段階の中盤で、一度メンバーと企画目的について考える機会を設ける。
- ・アンケートをとるタイミングが難しかった。→食料提供の導線をもっと考えるべきだった。
- ・他団体との連携を組むのが難しかった→役割を分ける。連絡はしっかりとる。
- ・提供側が赤字にならない仕組みを構築する必要がある。

MEMO



Health Week ～週慣化して健幸に～

FB+1

◆企画背景

大学生は高校生に比べて運動の習慣が少なくなると考えられる。その背景には「アルバイトが忙しい」「学業がおろそかになる」「運動の機会がない」など多くの理由があると考えられる。飯干ら (2003) は、大学生 526 名を対象に、過去 1 年間の運動の実施状況を調べ、運動しなかった理由について、調査・検討した。その結果、全体で見ると、運動・スポーツの実施が「月に 1～2 回以下」の「非運動実施群」は約 44% であった。また、運動を実施しない理由は「何となく機会がない」「アルバイトで忙しい」などの「運動潜在」が約 69% で最も多く、「運動をしたいと思わない」などの「運動拒否」は約 23% であったと述べている。このことから立命館大学びわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）においても、先ほど述べた調査結果と同様の運動不足である学生が数多く存在すると考えられる。また、門田 (2002) は、大学生の生活習慣病に関する意識、知識、行動についてみると、予防態度はあまり積極的ではなく、関心も低く、知識も不十分で、受診状況、健康行動・意識にも問題がみられたと述べている。つまり、運動するにあたって正しい理解のもと行動できない恐れがある。そこで、正しい知識をもって運動を行う必要性を本企画を通して学んでもらいたいと考える。FB+1 は、スポーツ健康科学部の学生に向けて毎週行っている「0 時限運動」のノウハウを活かし、BKC の学生に正しい運動習慣を身に付けてもらい、運動不足の解消さらに生活習慣の予防の手助けを行いたいと考える。

本企画は SDGs における「3: すべての人に健康と福祉を」について、FB+1 の団体理念である、「科学的根拠に基づき、幅広い世代の人々のニーズに合わせて運動指導を行うこと」をかけ合わせた企画を実施した。今回の企画では対象者は大学生であり、達成目標は「全ての人に健康と福祉を」である。この企画を行うことで参加者に運動をする習慣をつけてもらい、企画終了後も自身で運動を続けることができるような意識を作る手伝いをした。

◆企画詳細

[1]	名称	Health Week ～週慣化して健幸に～
[2]	主催	FB+1
[3]	実施場所	立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 スポーツ健康コモンズ 2F 多目的スペース（10 月 2 日～10 月 6 日）
[4]	日時	2017 年 10 月 2 日（月）～2017 年 10 月 6 日（金）8:00～8:30
[5]	企画内容	「Active コース」 Active コースでは運動不足の解消が目的ではなく、体を鍛えたいという人を対象とした。正しい筋力トレーニングの方法や知識を提供した。月曜から金曜にかけて 5 種類の運動プログラムを行った。（月曜日：体幹トレーニング、火曜日：上半身の筋力トレーニング、水曜日：下半身の筋力トレーニング、木曜日：スボササイズ、金曜日：有酸素運動）。リピーターの獲得に成功した。 「Enjoy コース」 Enjoy コースでは運動不足の人を対象に行った。生活習慣病にならないための正しい知識を提供し、無理なく体を動かす方法を伝えた。月曜から金曜にかけて 5 種類の運動プログラムを行った。（月曜日：座ってストレッチ、火曜日：寝ながらストレッチ、水曜日：ウォーキング、木曜日：ヨガ、金曜日：エアロビクス）。Active コースと同様に、リピーターの獲得に成功した。

◆企画結果

■参加人数 57人 / 5日

■考察

[1] 参加者への効果

- ・朝早くに集まって体を動かす習慣をつけることで規則正しい1週間を送ることが出来る。
- ・誰かと約束して一緒に運動することで、朝起きなければならないという連帯感が出て、継続することが出来る。

[2] 主催団体への効果

- ・指導経験の浅い1回生にとっては、参加者が同じ大学生ということもあり程よい緊張感の中で指導をするいい経験になった。
- ・今後の学生向けの企画への参考になった。

[3] 協力者への効果

- ・大学側にとってはスポーツ健康コモンズを学生が主体となり運動指導を行う新しい取り組みを提案出来た。



◆今後の目標

- ・団体内で SDGs を理解していない人がいたため、参加者への SDGs の説明がおろそかになってしまった。
→団体内で事前に内容の共有をするべき。
- ・企画への参加者がスポーツ健康科学部に偏ってしまう。
→他学部への情宣の手段を見つける必要がある。他学部の学生のニーズを探る必要がある。
- ・コースによって参加者数に大きな差が出てしまう。
→人数が少なくなってしまう際にでも対応できるようなメニューを用意しておく。

MEMO



空を感じよう ～熱気球搭乗体験～

飛行研究会ダンデライオン

◆企画背景

「これからの社会を生き抜く上で、学生にとって本当に質の高い教育とは何か？」この難題を解決する際のアプローチの1つとして、実際の体験型の活動を充実させることが考えられる。昨今の子供たちの自然での体験不足は深刻な問題であり、独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センターによる「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」において、平成10年度から平成17年度までで、「海や川で泳いだこと」をまったく体験したことの無い子供の割合が16.2%も増加している。その他にも様々な体験の不足が確認できる。そこで今回の Sustainable Week において、立命館大学びわこ・くさつキャンパス（以下 BKC）の学生に実際に体験することの素晴らしさを体感してもらうことのできるスポーツがある。それが熱気球である。熱気球はその名の通り、熱の上昇浮力を利用して空を飛ぶ乗り物であり、スカイスポーツの1つである。しかしながら、BKC の学生が熱気球を実際に見る機会は非常に限られている。例えば、中学や高校の授業で、熱気球の飛ぶ原理などを題材とした物理の問題を解いたことのある学生は多いと思うが、実際に気球の大きさや、バーナーの音、炎の熱さなどを自分の五感で感じたことのある学生はほとんどいない。私たちは、机の上だけでは感じ取れない実際の体験が非常に大切であると考え、これは文部科学省からも「思考や実践の出発点あるいは基盤として、あるいは、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくために体験が必要である」という報告が出ている。気球に乗る体験を通して、実際に気球の構造や飛んだ時の感覚、さらに空まで行けば、地球の丸さもわかるかもしれない。このような実体験による学びの深さをぜひ BKC の学生に感じ取ってもらいたい。また実際に行う係留飛行は様々な場所で行われているが、比較的簡単に気球体験のできるものとなっているため、多くの参加希望者が見込まれる。今年の4月に兵庫県の加西市で行われた係留イベントにおいては、定員330人に対し、1542人の応募が殺到した。そこで、Sustainable Week においても多くの学生が熱気球に興味を持ち、BKC において気球が存在感を持つことで、BKC の新たなブランドイメージの増進に一役買いたい。そして何より、BKC が率先して体験学習の大切さを教育に携わる多くの方にアピールしていきたい。

本企画は SDGs の「4. 質の高い教育をみんなに」について、体験型学習の大切さととらえて、気球に乗る体験を通じて実体験の素晴らしさを BKC の学生に伝える。またこの活動を通して教育に関わる方々に体験型学習の大切さを再確認してもらった。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|---|
| [1] | 名称 | 空を感じよう～熱気球搭乗体験～ |
| [2] | 主催 | 飛行研究会ダンデライオン |
| [3] | 実施場所 | 10月1日（日）：クインススタジアム
10月2日（月）：第3グラウンド
10月3日（火）：第1グラウンド（雨天中止） |
| [4] | 日時 | 2017年10月1日（日）、2日（月）7:30～9:00 |
| [5] | 企画内容 | 「熱気球搭乗体験」
一般学生から希望者を募り、係留飛行を体験してもらった。実際に空を飛ぶ感覚を肌で感じてもらった。
20人/1日×3日＝60人を集客目標とした。気球の減価償却費のため、1人1500円を参加費とした。
「気球教室」
係留飛行までの待ち時間でホワイトボードを使い、気球の構造や原理、競技の種類等を説明した。 |

◆企画結果

■参加人数 25 人 / 2 日

■考察

搭乗飛行中のお客様の反応では、自分が空を飛んでいるという驚きをはじめの印象で、次にバーナーの音の大きさと熱気に驚くといった声が多く聞かれた。

[1] 参加者への効果

・今まで熱気球というものを見たことの無かった方々に熱気球の素晴らしさ、空を飛ぶという感覚を体験していただいた。また地上と上空の風の感じ方などを肌で感じてもらうことができた、上空でのお客様の反応から受け取ることができた。

[2] 主催団体への効果

・係留飛行という今までやってこなかった難しいチャレンジを前に、部員が一致団結して企画運営をすることができた。また人目の集まるクインススタジアムで気球を上げたことで、ダンデライオンそのものの宣伝効果につながった。

[3] 協力者への効果

・今回の係留飛行を行う上で、実行委員会や学生オフィスの皆様に多くのご協力をしていただいた。今までの活動は気球関連の方だけと接する機会が多かったが、今回の活動を通じて、学内の多くの方にも気球の魅力を伝えることができた。



◆今後の目標

- ・気球の立ち上げ、車の搬入、参加者受付など、係留飛行は一人で行うことはできない
→メンバーの一人一人に役割を与え、自覚を持って行動させた
- ・第3グラウンド付近を歩いている人が少なく、さらに上空からの景色も森に囲まれていてあまり良くなかった
→開催場所を第1グラウンドに変更する

MEMO



満天の星を体験しよう

草津天文研究会

◆企画背景

現在、さまざまな社会問題がある中で、草津天文研究会は「子供の理科離れ」と「光害」に着目した。子供の理科離れの原因としては、「生活していくうえで必要と感じない」、「現代の科学技術の成果は興味があるが、科学技術自体に興味がない」、「小学校では実験・観察中心だったが、中学より先になると座学がほとんど」などがあげられる。特に、小学生と中学生では、顕著な差がみられる。平成 25 年度の全国学力テストのアンケートの結果では、理科の勉強が好きと答えた小学 6 年生が 83.5% に対し中学 1 年生は 61.9% であった。その原因として、中学以降になると、理科の勉強内容が理論的になり、座学が中心となることがある。実際、立命館大学びわこ・くさつキャンパス (以下 BKC) の理工系の授業でも、ほとんどが座学である。そのため、理科が楽しいという感覚は大学でも薄れてきていると容易に推測できる。これを改善するために、座学だけでは味わえない理科の魅力を感じることができる体験型の教育が必要だと考えた。もう 1 つの社会問題である光害とは、良好な「光環境」の形成が、人工光の不適切あるいは配慮に欠けた使用や運用、漏れ光によって阻害されていることである。その結果、私たちの活動の 1 つである天体観測は大きな被害を受けている。天体観測の際、遠く暗い山で観測を行っている。本来ならば、遠い暗い山で見ることができる星は BKC でも見ることができるはずである。しかし、実際は観測することができない。これは、BKC の明かりや街明かりが大気中の塵などによって拡散され、夜空が明るくなっているためである。その結果、BKC の学生たちは本来の夜空や星空の魅力に気付かず、多くの場合、光害を認識していないと考えられる。現状として、BKC においても学生がいらない教室や施設の明かりがついていることが目立つことから、これらを解決するためにまず、光害の認知を広げることを必要である。以上のような社会問題を考えるきっかけとなるように、草津天文研究会は SDGs の「4: 質の高い教育をみんなに」と絡めて企画を行うことを考えた。また、本企画により、立命館大学に対して、学生が天体観測を生涯学習の 1 つとして考えるきっかけとなる、また今後、立命館大学が社会問題について取り上げる体験型の授業や機会を増やすことを提言したい。

本企画は SDGs の「4: 質の高い教育をみんなに」において、プラネタリウムを使用し、普段の生活で体験できない実際の星空に近い夜空を体験型学習として学生や地域の方に見てもらい、星に対して興味を持ってもらう。また、街中で見ることができる星空と私たちが観測で撮影した星空の写真を比較し、光害について知るきっかけを作った。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | 満天の星を体験しよう |
| [2] | 主催 | 草津天文研究会 |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク 2 階 (10 月 1 日)
セントラルアーク 1 階 (10 月 3, 4 日) |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 1 日 (日) 13:40 ~ 16:30
2017 年 10 月 3, 4 日 (火, 水) 16:30 ~ 18:30 |
| [5] | 企画内容 | 「プラネタリウム公演」
手造りのプラネタリウムで学生・地域の方に対して公演を行うことで、星の魅力を伝えた。 |

◆企画結果

- 参加人数 26 人 /3 日
- アンケート 3,4 日の参加者 (16 名) を対象としたアンケートを実施
 - 星に興味を持てたか：93% が持てたと回答
 - 光害について知っているか：62% が知らないと回答
 - BKC に天文台があることを知っているか：25% が知らないと回答
 - BKC の天文台を使って星を見てみたいか：87% が見てみたいと回答

- 考察

アンケートより、目的の一つである天文普及活動が達成できた。しかし光害については半分以上の参加者に知られていないため認知度を広める必要があった。BKC 内の学生でも BKC 内に天文台があることを知らない人がいることが分かった。また、多くの学生が天文台で星を見てみたいと回答したため、立命館大学に天文台の活用を広げることを提案する。

[1] 参加者への効果

- ・アンケートの結果よりほとんどの参加者に対して星の魅力・面白さを伝えることが出来たと考えられる。また、光害の認知度を広げることが出来たと考えられる。

[2] 主催団体への効果

- ・学生や地域の方に公演を行うことで、星の魅力を体験してもらうことができた。また、新しいプラネタリウムのテスト公演であったので、多くの課題を得る機会となった。

[3] 協力者への効果

- ・大学側にとっては、天文台の存在を学生の中でも知らない人いることを知る機会となり、今後の天文台の活用について考えるきっかけとなると考える。

◆今後の目標

- ・新しいプラネタリウムの調整が上手くいかず、DIB とのリハーサルや当日 (10/4) 企画が行うことが出来なかった
→企画場所で調整をしていたため、企画実施の前日に調整を済ましておく。調整が出来ない場合は旧式のプラネタリウムを代用し、企画に参加したいと集まっている方を優先的に対応する。
- ・団体内で SDGs についてあまり理解していなかったため、企画自体が SDGs に沿った内容でなくなってしまった。
→団体内で SDGs についての勉強会など、SDGs を理解するための場を設け企画を実施する。

MEMO



BKC - バルーンに気持ちを込めようキャンペーン - color-free

◆企画背景

現在、テレビや新聞、SNS 等でも見かけることが多くなった LGBT(レズ・ゲイ・バイ・トランスジェンダー)。日本では人口の 7.6% (左利きや AB 型の比率と同程度) が LGBT であると言われている中、多くの当事者がカミングアウト (自分のセクシュアリティを誰かに伝えること) することができず、ひとり悩み、苦しみ、「孤立」しているのが現状である。この誰にも言い出せない「孤立」という問題が、当事者たちの心に大きな負担を与えている。実際に、LGB の 25%、T の 35% がうつ病を経験し、性同一性障害の約 70% が自殺を考える。また、約 70% の当事者が職場や学校でのいじめや差別を経験しているといった調査もあり、問題は極めて深刻であると言える。2015 年には、一橋大学において、アウティング (他人のセクシュアリティを許可なくばらすこと) をきっかけに転落死したという事件も起こっており、同じ大学生としても最早無視できる状況ではない。しかしながら、これらの問題の深刻さとは対照的に、立命館大学びわこ・くさつキャンパス (以下、BKC) での LGBT への関心は極めて低く、事実、この Sustainable Week の代表会議でさえ、ほぼすべての学生や教職員に対して、LGBT について、一から説明しなければならないという状況であった。さらに、私が 4 年間 BKC で生活していて、LGBT の活動やイベントの情報を一度もキャッチできないほどに、BKC においての LGBT に対する活動やサポートは少なく、大学としても LGBT に対する意識が低いという現状である。上記したような大学での状況を踏まえ、color-free は、より多くの人に LGBT を知ってもらい、そして、どんな人であっても、胸を張って、大きく前を向いて生きられる、そんな「ありのまま」の思いを届けることを目指し、バルーンリリースを行う。カラフルな風船で空を彩ることで、ジェンダーに、上下の概念にとらわれることのない「ありのまま」の生き方への尊重を表す。

本企画は企画を通して、より多くの人に LGBT の存在を知ってもらうことにより、SGDs の達成目標「5: ジェンダー平等を実現しよう」を達成する。また、学生や一般の方へ LGBT に関する団体についての情報を提供することにより、LGBT についての講演や企画への参加を促進する。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | BKC - バルーンに気持ちを込めようキャンペーン - |
| [2] | 主催 | color-free |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク、セントラルサーカス |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 1 日 (日) ~ 2017 年 10 月 5 日 (木) / 10 月 10 日 (火) 11:30 ~ 12:30
10 月 1 日 (日) ~ 10 月 5 日 (木) 常設 / 10 月 10 日 (火) 11:30 ~ 12:30 |
| [5] | 企画内容 | <p>「メッセージパート」</p> <p>企画概要について、また、LGBT 紹介の展示を通して企画内容を理解してもらい、「ありのまま」の自分をテーマに、リリースする風船に入れるメッセージを記入してもらう (模造紙等に記入してもらう)。企画内容について理解してもらうと同時に LGBT についての理解を深めてもらう。また、多くの人に自分自身の「ありのまま」について考えてもらう。</p> <p>「リリースパート」</p> <p>学生を中心にバルーンを配布し、噴水前でバルーンリリースを行った。</p> <p>虹色の風船で空を彩ることで、ジェンダーに、上下の概念にとらわれることのない“ありのまま”の生き方への尊重を伝える。</p> |

◆企画結果

■参加人数 232人 / 5日（メッセージパート） 400人 / 1日（リリースパート）

■アンケート 参加者を対象としたアンケートを実施

Q1、好きになる性別は？（232人が回答）

- 男性を好きになる 【男性：13人（11%） / 女性：97人（83%） / カスタム：7人（6%）】
- 女性を好きになる 【男性：71人（74%） / 女性：14人（15%） / カスタム：11人（11%）】
- 誰も好きにならない 【男性：5人（26%） / 女性：14人（74%） / カスタム：0人（0%）】

Q2、恋人に一番求める条件は？（345人が回答）

- 顔 【男性：23人 / 女性：21人 / カスタム： 5人】
- 性格 【男性：30人 / 女性：47人 / カスタム： 6人】
- 能力 【男性：8人 / 女性：15人 / カスタム： 2人】
- スタイル 【男性：9人 / 女性：23人 / カスタム： 3人】
- 金 【男性：8人 / 女性：9人 / カスタム： 4人】
- 価値観 【男性：20人 / 女性：35人 / カスタム： 4人】
- 尊敬 【男性：8人 / 女性：22人 / カスタム： 2人】
- ラフさ 【男性：8人 / 女性：8人 / カスタム： 2人】
- 恋人いない 【男性：10人 / 女性：9人 / カスタム： 4人】

■考察

Q1のアンケートでは、男性の11%が男性を好きになるに、女性の15%が女性を好きになるという回答をしており、立命館大学において、電通LGBT調査によるLGBTの割合7.6%※1よりも多い割合でセクシュアルマイノリティの方がいる可能性が示唆された。

Q2のアンケート結果から、恋人に求める条件として、性別によって若干の差異はあるものの、どのセクシュアリティにおいても、内面（性格や価値観など）の指標をより重要視する傾向が確認された。この結果は現代における、人の外見にとらわれることなく他人の本質を見抜こうという意識の表れであり、LGBTに対する偏見の緩和、柔軟な対応に寄与していると示唆される。同時に、今後のセクシュアリティに関しての多様な社会（虹色ダイバーシティ）に大きく貢献する思考であると考えられる。

[1] 参加者への効果

- ・バルーンリリースやアンケート、ブース展示を通して、LGBTの認知度、理解度の向上

[2] 主催団体への効果

- ・団体の宣伝・一般学生や教職員、地域の方とのコネクションの増加

[3] 協力者への効果

- ・バルーンリリースのイベント性に伴う、協力者、団体の知名度の向上

MEMO



再生可能エネルギー合同ライブ

立命館大学音楽サークル合同

◆企画背景

現在、化石燃料の可採年数が 52.9 年であり、日本において火力発電に頼った今までの生活を将来も継続していくことは極めて難しい。また、火力発電を含む一次エネルギーによる発電は環境負荷が高いため、持続可能な社会を目指すためには、一次エネルギーから、環境負荷の低い再生可能エネルギーへ発電方法を転換することが求められている。しかしながら、再生可能エネルギーは、コスト水準が一次エネルギーと比較してまだ高いこと、不安定な自然エネルギーを活用することによる供給の不安定性、景観、騒音等の環境影響の点で課題が残っているため、我々は持続可能な社会を目指すために、再生可能エネルギーの課題を一つ一つ解決しながら、その中で積極的にエネルギーの転換を図る必要がある。そこで、我々音楽団体は、本企画内で、実際にライブで用いる電力の発電方法を従来の火力発電から再生可能エネルギーによる発電方法に転換して行い、実際に、再生可能エネルギーに対する課題が多数ある中で、日常生活において再生可能エネルギーを用いることが可能であることを示したい。そして我々が再生可能エネルギーによる電力ライブを行うことによって、聴き手が今一度再生可能エネルギーについて考えるきっかけ作りの場を提供することができると考えた。

本企画は立命館の音楽団体が合同となり、持続可能な社会に適した音楽活動を提案するため、SDGs における「7: エネルギーをみんなにそしてクリーンに」を採択した。私達は 5 日間の再生可能エネルギー合同ライブを通して、ライブの聴き手である立命館大学生や一般の方に対して再生可能エネルギーへの可能性を理解してもらうこと、再生可能エネルギーを用いて音楽を楽しめる可能性について示すこと最終目的とした。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | 再生可能エネルギー合同ライブ |
| [2] | 主催 | アコースティックギターサークル・アカペラサークル Song-genics
カラーガードサークル LUSTER・書道部 |
| [3] | 実施場所 | (晴天) 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 噴水前路上
(雨天) 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 プリズムホール又はアーク 1 階ステージ |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 2 日 (月) ~ 2017 年 10 月 6 日 (金) 12:20 ~ 13:00 |
| [5] | 企画内容 | 「開会式 (1 日目)」
書道パフォーマンスでの Sustainable Week の開催告知・5 日間の再生可能エネルギー合同ライブ開催の告知。使用する再生可能エネルギーの簡単な紹介。衣装は統一衣装着用。
「バトンリレー式合同ライブ (2 ~ 4 日目)」
LIVE 前半は各団体それぞれの演奏、LIVE 後半は 2 団体の演奏を行う。使用するエネルギーは再生可能エネルギーである太陽光パネル。衣装は統一衣装着用。集客は 100 人 / 日をめざした。
出演団体 2 日目 (10/3) 前半 Song-genics 後半 Song-genics × LUSTER
3 日目 (10/4) 前半 LUSTER 後半 LUSTER × アコースティックギターサークル
4 日目 (10/5) 前半 アコースティックギターサークル
後半 アコースティックギターサークル × Song-genics
「閉会式 (5 日目)」
カラーバルーン企画とのコラボ企画。バルーンを空に放つ企画を盛り上げるために、3 団体合同 (アコースティックギターサークル・Song-genics・書道部で演奏を行う。演奏曲数は 3 曲。 |
| [6] | 協賛先 | アースシグナル株式会社 |

◆企画結果

■参加人数 1日目 15人 / 2日目 50～70人 / 3日目 50～70人 / 4日目 50～70人 / 5日目 70～100人

■考察

本企画では①太陽光発電電力を自らで見つけること②他団体との連携が特に難しかった。①に関しては、どうやって太陽光発電電力を用いてライブを行うのか部員と話し合い、自ら学びながらライブ運営を考えていくことができた。Sustainable weekにかかわった部員全員考えながら初めての課題に取り組むことができたと思う。また、私たちの要望に合う太陽光発電電力を探し出すのが大変困難であったが、今回株式会社アースシグナル様から Solar Pod をお借りすることができ、今までにない新しい達成感を部員ともども感じることができた。

②に関しては、時間がなく、またそれぞれ自団体の活動も活発であったため、集まることが難しかった。もっと集まるべきであったが、どのコラボの演奏も素敵な演奏ができていたのではないかなと思う。また、音楽という共通言語を通して、違うジャンルの団体同士で楽しくライブができた。

[1] 参加者への効果

- ・企画参加中：音楽を楽しむ
- ・企画参加後：再生可能エネルギーへの理解を深める、サークルへの理解を深める

[2] 主催団体への効果

- ・企画参加中：再生可能エネルギーへの理解を深める、サークル間の交流、サークルの宣伝
- ・企画参加後：サークル間の今後の交流促進

[3] 協力者への効果

- ・企画参加中：企業（市民団体）の宣伝
- ・企画参加後：企業（市民団体）の宣伝、交流促進

MEMO



シェアップ

watnow

◆企画背景

現在、日本全国のごみの排出量は 4,432 万トンで、国民 1 人 1 日約 947 グラムのごみを排出している計算になる。また、そのリサイクル率はわずか 20.6% で、回収されたおよそ 80% のごみが焼却所によって処分されている。また、立命館大学びわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）では A4 サイズに換算すると 2015 年度に 23,348,375 枚もの紙が使用されており、その使用量は 2014 年度に比べて増加傾向にある。立命館大学では毎年春に新歓期と呼ばれる期間があり、その時期にサークルや団体に関する非常に多くのビラが配られる。また、秋には文化祭が開催され、その際にも多くのポスターやビラが作られる。1 つ例を挙げると、去年 watnow ではビラ費用として 20,000 円を使用している。それだけ多くのビラを作ったとしてもすべての人にすべての情報が行き渡るわけではない。そのような紙の無駄が BKC では毎年発生している。アプリで全てのサークルの情報を一気に開示することが出来れば、ビラの費用を抑えることができ、そのような紙の無駄を大幅に減らすことができる。さらに多くの人に適切な情報が行き渡らせることができる可能性もあると言える。加えて、情報を受け取る側はスマートフォン上のアプリで全ての情報を管理することができるので、多くの人を使って大量のビラをその期間中、毎日のように配る手間も省くことができる。また、ビラをもらう側もわざわざそのビラをもらいにいくなどの労力を省くことができる。私たちは、そのような便利なアプリを作り、多くの学生にとって過ごしやすいキャンパスを実現し、さらに学生 1 人当たりが排出するごみの量を少しでも減らしたいという考えがあり、この企画を進めた。

本企画は SDGs における「11. 住み続けられるまちづくりを」という目標に対して、学生や教職員が普段過ごす BKC をより快適に過ごすことができるキャンパスにすることとして解釈した。そのために、BKC 内で発生している紙の無駄を昨年度より減少させると同時に全てのサークル、団体の情報を 1 つのアプリにまとめることを行った。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | シェアップ |
| [2] | 主催 | watnow |
| [3] | 実施場所 | 個人のスマートフォン内 |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 1 日（日）～ |
| [5] | 企画内容 | 「シェアップ」
Sustainable Week に参加している団体の企画内容、企画に対してのいいね機能、立命館大学内のマップを一つのアプリに集約させた。 |



◆企画結果

■考察

[1] 参加者への効果

・ Sustainable Week の情報をいつも所持しているスマートフォンでタイムスケジュールや企画情報を確認することができたので、紙の媒体とは違い、情報を忘れてしまうことや紛失するリスクが少しでも低くなった。

[2] 主催団体への効果

・ 技術力の向上につながった。

[3] 協力者への効果

・ 同じく技術力が向上した

広告の方法が甘いと、予想していたよりも人が集まらず、自分たちが予測していたような動きができないので、企画が実行される前からしっかりと計画をしておくことが大切である。また、通常であれば二週間程度でアプリの申請が通るが、それが1か月もかかってしまったのでより行動を早め早めにしておくべきであったと気づくことが出来、全ての人に満足していただけるようなアプリを作る上でのインセンティブの向上につながった。



◆今後の目標

- ・ インストール数が予想よりもかなり少なかった。
→ 広告の方法を改善させる
- ・ iOS のアプリの申請の時間が異常に長くなってしまった。
→ 何度もメールで申請を行った。
- ・ 予想していたよりもアプリ制作のための勉強期間が長くなってしまった。
→ 第三者の目からチェックをもらいながら、事前に計画を入念に立てる。

MEMO



防災の秋

IVUSA 京都

◆企画背景

災害大国日本において建物・道路などのインフラは、防災面に対して世界トップレベルの技術を誇っている。しかし防災レベルが高いがゆえ、それに対する絶対的な信頼をおくことによって慢心が生まれてしまい、個々の防災意識が低いことが現状である。実際に内閣府の年代別、「災害に対して家族と話し合うか」という調査においてはどの年代も 50%前後となっており、さらには「家具や家電などの転倒・落下・移動防止策の実施状況」という調査においてはほぼ全ての家具・家電などの固定ができている人の割合がどの年代も 20%前後となっている。また 20～29 歳の若年層では 13.6%と大変低い結果となっている。これはあくまでも一例ではあるが、総じて国民の大半が防災に対して積極的に行動していないことがわかる。

私たち IVUSA 京都では 1993 年の北海道南西沖地震災害に対する救援活動を始まりとし、地震・津波・水害・豪雪・噴火・竜巻災害など 46 の災害に対し、28 都道府県 66 市区町村において計 149 回の活動を行い、延べ 6,801 人の学生が被災地で家屋の片づけや泥の撤去や精神的ケアなどを実施している。また CMT（Crisis Management Training）といった危機対応講習を開き、日常での危機を分析・研究した成果と、過去 20 年間にわたる災害救援活動の現場で身につけたスキルを、実践的かつ誰にでも出来る応急救命法と組み合わせたものにアレンジし、学生のスキルアップも目指している。これらの現状を踏まえて、本企画において、IVUSA 京都ができることは何であろうかと考えたときに自分たちと同年代の大学生に対して防災に対する働きかけ、防災への興味関心を持ってもらい、いざ災害が起こった時に地域の中で率先して災害に対応できる人になってもらう事だと考え、企画の実施に至った。

本企画は SDGs の「11：住み続けられるまちづくりを」について災害に対する抵抗力・耐久力を目指す総合的政策および計画を導入・実施した都市および人間居住地の件数を大幅に増加させ、あらゆるレベルでの総合的な災害リスク管理の策定と実施を行うことを目標にした。それに対して私達 IVUSA 京都は災害時の対応力を高めることがこの目標に対する働きかけだと考える。したがって私たち BKC 学生が災害時に適切な行動を取る事が出来るようになり、少しでも地域に住む人々の助けになれば良いと考えた。そのため、本企画では大学生の防災意識とその興味・関心の向上を図った。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|-------------------------------|
| [1] | 名称 | 防災の秋 |
| [2] | 主催 | IVUSA 京都 |
| [3] | 実施場所 | セントラルアーケードステージ |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 3 日（火）13:00～15:00 |
| [5] | 企画内容 | 「防災選手権～AED スタンプリング・包帯法～」 |

◎ 13:30～ 防災選手権 【第一部門 AED 争奪合戦】

① AED の説明

② ルール説明

ポイント制で順位ポイントと AED ポイントがあり。指定された建物の AED を見つけそこに置かれている番号札を取ってくる。各地点に置かれている番号札は、スタート地点のセントラルアーケードから遠くなるにつれポイントが高い。だが順位ポイントもあるためいかに早く取ってくるかも重要になってくる。

③ ペアごと競争

待っている間は、AED は学内に多くありその場所を知っておくことは今後必要な場面になった時にすぐに駆け付けることができるというように AED の補足説明をしておく。

④ 順位発表

【第二部門 包帯マキマキ競争】

①包帯法説明

② IVUSA 学生が前に立ち見本を見せる

③参加者も一緒にやってみる

④タイム競争

これを頭、腕など何種類かやりポイント付けする。

【第三部門 早押しクイズ対決】

前二部門の内容の復習クイズ

これら三部門の合計得点によって全体の順位が決まる。景品は防災グッズ。

◎ 14:30 ~ 15:00 実際に体験コース

・ AED スタンプラリー ・ 包帯法体験

最後にアンケート

◆企画結果

■参加人数 6名

■アンケート 参加者全員が防災意識の向上を感じた。

■考察

[1] 参加者への効果

・ 普段気に留めないような AED の場所を把握することや包帯法を学ぶことにより、いざ災害が起こった時に自分の身を守るのはもちろんのこと、周りにいる人の身も守ることもできるように日ごろからの防災に対する意識向上を呼びかけることできた。

[2] 主催団体への効果

・ 普段学生がどれほど防災に対して意識があるのかを今回の企画を通して、感じる事ができた。災害が起こった時に実際に動けるようになることは地域のためになる故、学生に対してどのようには働きかければ防災に対する意識向上へつながるのかの一つの指標となった。

我々が普段行っている危機対応講習に基づき今回の企画を行ったが、その内容を何も興味のない人に対して 伝えることの難しさを学んだ。どのように伝えたらいいのか試行錯誤しながらの企画だったため、まだまだ やれたことはあったのではないと思うのが率直な感想である。今後、どうやれば防災に対してもっと興味・関心を持つようになるかを模索していこうと思う。

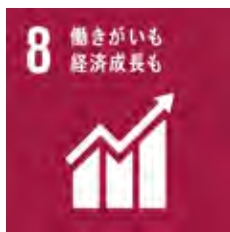
◆今後の目標

・ 参加者が少なく、全体的に学生は防災に興味がないことに気づいた。

→日ごろからもっと SNS を使って防災に対して興味・関心が湧くような投稿や、IVUSA の災害救援活動の様子などを投稿し、災害・防災は決して他人事ではないことをアピールしていく。

→先日学内であった避難訓練で乾パン・水などを目立つ場所で配付していたように、まずは形から入り、そこから興味・関心を持ってもらうようにする。

MEMO



学生よ、大志をいだけ - 学べ、起業家精神 -

BKC インキュベータインターン生 23 ～ 27 期

◆企画背景

近年、日本では、EDGE プログラム (グローバルアントレプレナー育成促進事業) を初めとしたイノベーション人材の育成を、国の政策の1つとしている。学校法人立命館では EDGE プログラムや COI (Center of Innovation) に採択され、現在も、COI による大学の技術シーズの事業化を目的とした起業家教育支援プログラムであるリーンローンチパッドが開催されている。そこでは、大学の研究者のみならず、大学の職員や大学院生も巻き込むなど、その取り組みを大学も強化している。立命館大学には、アントレプレナー精神 (起業家精神) をもった研究者や学生がまだまだ少ない。その中でも、理系学部を中心とするびわこ・くさつキャンパス (以下、BKC) では、その傾向が顕著である。我々は BKC の学生に対して、起業家に必要なイノベーションを起こす自主的な行動力を育むことこそ重要であると考えた。そのために、我々が BKC の学生に、一般の学生とは異なる自身の将来にむけた自主性や行動力を育む機会を創出することを SDGs 「8. 働きがいも経済成長も」 に貢献するための目標とした。

実際、BKC 内のインキュベータ施設でインターンを経験した学生は、起業家と交流することを通し、以前よりも働くことに対して前向きで積極的な姿勢をとるようになった。また、インターン生が起業家と交流することは、アントレプレナー精神につながる自主性の育成に寄与していると考えられる。しかし、このデータは6か月間の業務に取り組んだ学生のアンケート結果であるため、今回 Sustainable Week の1週間で、同様の効果が得られるとは考えにくい。

そこで、今回 Sustainable Week 期間内で目標を達成するために、学生がアントレプレナー精神とは何かということを知り、さらに学生が大学・大学院で身につける専門知識を今後社会で活かすことができるように、夢や希望をもつきっかけを作ることが有効であると考えた。そこで、本企画では、BKC インキュベータに関係する方の講演会やポスター展示を通し、インキュベータ施設内の起業家精神について学生が知る機会を創出する。これにより、立命館大学に対して、アントレプレナー精神を持ち、将来活躍できる人材を育てるために、実際に自身の専門知識を活かし、独創的な働き方をしている先輩方と交流する機会を増やすことを提案した。

本企画は SDGs における「8: 働きがいも経済成長も」について、アントレプレナー精神を持つ学生の自主性と行動力を向上させることを目標とする。その解決策の1つとして、必要な学生がインキュベータの起業家と交流し、アントレプレナーに接する機会を増やすことを立命館大学に提言することで、学生のアントレプレナー精神育成のモデルケースを作ることとした。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|---|
| [1] | 名称 | 学生よ、大志をいだけー学べ、起業家精神ー |
| [2] | 主催 | 立命館大学 BKC インキュベータインターン生 23~27 期 |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク 1 階 |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 2 日 (月)、3 日 (火) 12:00 ~ 13:00 |
| [5] | 企画内容 | 「入居企業様代表者の講演会」
セントラルアークにてインキュベータ入居企業の代表者に事業内容、彼らの人生について語っていただいた。また講演時にアンケートを実施し、講演参加前後での意識変化を調査した。
「入居企業様ポスター」
セントラルアークに入居企業様のインタビューに関するポスターを掲示し、見てくれている人にアンケートに回答していただいた。 |

◆企画結果

■参加人数 43人 / 2日

■アンケート 講演会およびポスターを観覧している人を対象としたアンケートを実施

■考察

講演会参加前と参加後のそれぞれにおける「モノづくり、システム作り」、「新規事業創造」、「起業」への興味の程度を、5段階評価で回答してもらい、学生の意識変化を調査した。質問3項目のうち、後半になる程、取り組みへの難易度が増す。その結果が左図に示されている。難易度が低い取り組みへの興味は、参加前から比較的高めである一方、参加前後での意識変化は+0.44ポイント程度であった。一方、難易度が最も高い取り組みである「起業」への興味は、程度の絶対値は比較的低いが、参加前後の意識変化は+0.68ポイントと最も高かった。よって、本企画は参加学生のアントレプレナー精神の育成に、ある程度効果があったと考えられる。

[1] 参加者への効果

・専門知識が社会にどう生かされているのか、起業家の人生観を学ぶことができた。

[2] 主催団体への効果

・学生と交流することができた。

・団体の宣伝。地域のみならず、大学生全体を巻き込むことができた。地域に対する社会貢献となった。

[3] 協力者への効果（BKC インキュベータ）

・起業に関する学生の意識を知ることができた。

・講演会冒頭の紹介、紹介パネルの展示をすることで、認知度の向上を図ることができた。

◆今後の目標

会場が学生のフリースペースであるため、特に興味をもたず参加しない学生が目立ってしまった。また、今回は講演の内容の大部分を企業様に任せていた。そのため、単なるパワーポイントだけの講演では、興味があまり示さない学生を引き付けることができなかった。一方、動画や大きな音を駆使した講演は、会場内の多くの人の注目を集めていた。

→学生メンバーに余裕がある場合、企業様と一緒に内容や人の興味を引きやすいプレゼン資料（動画）を作る。余裕がない場合は、会場をフリースペースから、教室に変更する。

・起業に興味をもっている、所謂ターゲット層に企画を周知させることができなかった。具体的には、企業様ごとのビラ作成が後ろ倒しになり、広報期間を3～5日程度しか確保できなかった。

→集客を重視し、企業様にビラの許可をもらう期間を見越して早めに動き出す。

MEMO



Technology を体感しよう

ロボット技術研究会

◆企画背景

スマホや SNS が日常生活の欠かせぬ一部となり、生活のあらゆるモノがインターネットにつながり (IoT)、進化した人工知能 (AI) が最適化に向けて様々な判断を行う「第 4 次産業革命」が目前に迫っている昨今、世界中を見渡しても先進工業国をはじめ、科学技術の急速な進歩が進んでいる。日本が経済大国といわれた時代、日本の主要な輸出品は自動車や産業機械などの「製品」であった。しかし、現在は他国の技術力と生産コストに押され、日本製品はシェアを減らし続けている。まだ一部の製品における技術力は未だに健在であるものの、日本の強みといえる製品・技術力は減少し続けている。さらに現在の日本の義務教育では子供たちがものづくりに触れ合う機会は限られており、将来日本の科学技術の発展を担う小・中学生がものづくりに関わる機会が多いとは決していえない。そのような状況をふまえて危機感を持った政府は、国際的な産業競争力を高める手段として、その担い手となる人材の養成・確保に取り組み始めた。2020 年度からの小学校におけるプログラミング教育の必修化は代表的な取り組みと言える。それに伴い以前にも増して、教育現場で教える人材が不足している小学校を中心とした地域からの交流ニーズが高まっている。こうしたニーズにも応えるために工学系を専攻している大学生が先陣を切って子供たちにもものづくりに触れ合う場を提供することが最も効果的である。滋賀県内の大学で工学系の学問を学んでいる学生はごくわずかであることから、滋賀県の子供達を対象として我々が今回の企画を実施する。その結果、子供たちがものづくりの楽しさを実感し、さらに興味を持つことが期待できる。さらに、将来的に小・中学生たちへのものづくりに対する意識づけを促し、本活動を通して産業と技術の重要性を社会に訴える。

滋賀県が先進工業国である日本に属していることから、最終的な「9: 産業と技術革新の基盤をつくろう」の SDGs の目標達成は日本が情報インフラ等のさらなる技術革新が進むことである。そこで将来的に自分たちの世代とその下の若い世代で日本の技術革新を支えていくことがこの目標達成につながると考えた。よって私たちは SDGs の「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」を「技術力を持った人材を将来的に確保し、共に産業の発展を実現する」と解釈し、目標を達成するために将来を担う小・中学生たちにもものづくりに対する意識づけを促す。そこで本活動を通して当団体のロボコン機体を地域の方々 (メインの対象は小・中学生) に体験してもらうことで、科学技術に関する興味や関心を持ってもらった。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | Technology を体感しよう |
| [2] | 主催 | ロボット技術研究会 |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク 2 階 (10 月 1 日)
スポーツ健康コモンズ (10 月 2, 3 日) |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 1 日 (日) 13:00 ~ 16:30
2017 年 10 月 2 日 (月) ~ 2017 年 10 月 3 日 (火) 16:30 ~ 18:00 |
| [5] | 企画内容 | 「ロボコン観戦・ロボット操縦体験」
地域の子供たちを中心にロボットと触れ合いロボットの魅力を伝える。1 日に約 50 人の集客を目指す。
「ロボット紹介」
実機やプロジェクターを用いてロボットの製作方法や概要などを伝えることで、ものづくりへの魅力をたくさんのの方に知ってもらう。上記内容と共に実施して 1 日に約 50 人の集客を目指す。
「Dari K とのコラボ企画」
ものをキャッチするロボットを用いてペーパークラフトの SDGs のサイコロをつかんでいき、つかんだ SDGs の達成目標や数によって Dari K のチョコレートを提供する。つかんだ SDGs の目標の説明や Dari K の SDGs における取り組みの説明を盛り込む。 |
| [6] | 協賛 | Dari K 株式会社 |

◆企画結果

■参加人数	94 人 / 3 日
■アンケート	アンケート - 小学校低学年以下の子を対象としたアンケートを実施（保護者の方が回答）
	企画に満足したと回答 100%
	科学技術への関心を持ったと回答 100%

■考察

[1] 参加者への効果

・企画参加中では参加して下さる子供達がロボットの魅力を知れ、日常生活を過ごす上では体験できないことができた。また企画参加後はものづくりについての関心を持ってもらうことがアンケート結果により確認できた。

[2] 主催団体への効果

・企画参加中には地域の方や一般学生と滋賀県内の小学生・中学生さらには、その親にもロボットを知ってもらえた。また企画参加後にも当研究会活動の地域貢献などの分野での実績として宣伝につながる。

[3] 協力者への効果

・大学側にとっては企画参加中においてスポーツ健康コモンズのキャンパスイノベーションであり、

企画参加後は理工系を中心とした BKC において、工学系の活動をする事で全学への広報を実現できた。

・地域にとって企画参加中に NHK ロボコン等に出場したロボット触れ、参加後にも「ものづくりへの興味・関心」を持ってもらえた。

・食の分野で活躍されている Dari K 株式会社と科学技術の分野で活動している当団体は本来なら交わることはないが Sustainable Week 企画をコラボで実施することにより新たな層へと Dari K 株式会社のチョコレートや SDGs に意欲的に取り組んでいることへの認知につながった。

◆今後の目標

・当団体の参加者でも全員が SDGs を理解して企画していたとはいえない。

→準備期間を経て部内で勉強会等を行う。

・メインターゲットを地域の参加者としていたため学生の参加が少ない。

→学生にも興味や関心のあることを調査して企画に盛り込む。

・日曜以外の集客数が少なかった。

→企画場所が悪くさらに時間帯が悪くなかった。

MEMO



Sharing Basement Project

STEP

◆企画背景

国連児童基金ユニセフの調査によると、2015年の時点で、全世界で24億人が基本的な衛生施設を利用できず、水資源にアクセスできない人々も6億6,300万人近くに上っている。一方日本では水に恵まれ、上下水道技術が充実しているため、水資源や衛生施設に不満を感じることはあまりない。このように、日本ではありふれた技術・産業が、一部の国には行き渡っていない実態がある。優れた産業・技術を有していたとしても、アウトプットできなければ持続可能な開発には繋がらない。このような産業や技術情報の格差を是正させるためには、BKCの学生には、情報共有の大切さを身近に感じてもらうことが必要であると考えている。そのため、理系学部をメインとした立命館大学びわこ・くさつキャンパス（以下、BKC）で複数の分野にまたがるような学部を横断する科学系学生団体主催の体験型サイエンスワークショップを通して、将来の研究に向けた情報共有や知識の取得の機会を設ける。また、参加する子どもたち向けに、これからの将来を担う彼らに対し、英語のスピーチコンテストを催す。このことによって、将来の産業発展の担い手に必要不可欠とされる英語力の向上を促す企画を実施する。

本企画はSDGsの9番目の目標である「産業と技術革新の基盤を作ろう」について、自分たちの産業や技術に関するアイデアを互いに共有し合う機会を設けることが、産業・技術の革新的な発展のための基盤構築に結び付くと捉えた。この目標を達成するために、①地域社会と大学の交流による関係強化、②国際科学技術交流を促進する基盤構築を目的とし、体験型企画や英語のプレゼンテーション大会を行った。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | Sharing Basement Project |
| [2] | 主催 | STEP (Science & Technology English Presentation) |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク |
| [4] | 日時 | 2017年10月1日（日）13:00～16:30 |
| [5] | 企画内容 | プレゼンによって学生団体と地域社会との距離感を短くする |

「開会式」

Sustainable Weekの趣旨・概要説明、来賓・代表者の挨拶（日本語、英語同時翻訳）、PV放映を行った。100人の集客を目指す。【ターゲット】：学生、地域の方々、大学関係者、メディア

「ブース交流会」

参加団体が各々ポスターを用意し、プレゼンを行った（日本語、留学生のみ英語）。ブース空間を作り、各団体に自由に自分たちの活動内容をプレゼンする機会与えた。この機会を通して発表者に自ら行動を起こし、プレゼンテーションを通して学外に発信するという流れを体験してもらった。ブース交流会を経て、新しい知識を得ることが出来たのかアンケートを実施して企画の効果を評価した。【ターゲット】：地域の方々

「体験型ワークショップ」「英語ボードゲーム」

学生団体SUP!とTISA主催の体験型ワークショップ。参加小学生に英語に興味を持ってもらうためのアプローチを行った。【ターゲット】：小学生

「English 1min Presentation Contest」

草津市内にある英語・英会話教室に通う小学生の「My favorite」をテーマとするプレゼンテーションコンテスト、審査員は立命館教員、留学生が務めた。英語を初等教育の段階で学習することは重要であるため、本企画への出場によって小学生の英語学習への意欲向上を目指した。また、学部生自身も自分たちより若い世代の子どもたちの英語に対する姿勢を見ることで、現状の語学学習を見直す機会となりうることを期待した。【ターゲット】：小学生

「国際活動（事前活動）」

Sustainable Weekの英語での広報活動、アンケート・司会・プレゼンテーションなどの翻訳、他の団体の活動の英語サポート、留学生との企画相談を行った。留学生も日本人学生との交流をもっと持ちたいと考えているため、この企画への参加、運営を通してコミュニティを広げてもらった。また留学生がイベントの企画者側となって主体的に何かを行うことは言語の問題から難しいためSTEPが仲介となってブース企画などを行うことは、留学生の主体性を尊重する上で重要だと言える。【ターゲット】：留学生

◆企画結果

■参加人数

99人 / 1日

■アンケート

プレゼンテーションコンテストに出た小学生にインタビュー（以下、原文のまま記載）

Q1. SDGsについて学んでみてどうでしたか？

A1. 一回情報の授業でSDGsについて教えてもらったことがあったんですけど、こうやって自分で深く好きなだけ調べられる機会は初めてで、私は今回教育について選んだんですけど、すごいたくさんの教育についての問題があることを知って、それを解決していくための手段を自分で考えることができて良かったです。

Q2. プレゼンを作るときに一番難しかったことはなんですか？

A2. SDGsというテーマが自分には身近じゃなくて、少し難しかったけど、今回そのことについて知れたし、世界情勢についても知れたので良かったですと思います。

Q3. プレゼンを作っていて一番楽しかったことはなんですか？

A3. 私のプレゼンを作成しているときにどんどん完成に向かって行っているのが楽しくて、ペアの人とかみんな話し合っているとどんどん完成に向かっていくのは本当に楽しかったです。

Q4. 大学生とプレゼンを作ってみてどうでしたか？

A4-1. 私たちもSDGsという言葉は知っていたのですが、内容について全然知らなかったもので、すごいわかりやすく教えてくださって、すごいよかったし、自分の勉強にもなったと思います。また、ここでプレゼンテーションできてとてもいい経験になったと思います。

A4-2. お姉さんとお兄さんはすごく優しく、丁寧に教えてくれて、スライドとかもすごく綺麗に作ってくれて、プレゼンテーションのやり方をすごく丁寧に教えてくれてとても楽しかったです。自分の将来についてもみんな一緒に考えてくれて、そういうのがいい経験になったと思います。

A4-3. 教育ってテーマを決めたときにどこからどう入っていくっていう、教育からどう具体的にテーマを決めるというのがあまり自分ではわからなかったけど、字が読めない人もいるんで、ということを教えてくれたり、いろんなことを自分に教えてくれて、プレゼンテーションのやり方もそうやし、英語の発音とかも教えてもらったのでいい経験になったと思うし、ここでこうやって発表させてもらっていい経験になったので嬉しかったです。

■考察

[1] 参加者への効果

- ・小学生が、大学生とともにプレゼンテーションを作成することで、大学生の豊富な知識と、小学生の豊かな感性によって、素晴らしいプレゼンテーションを作り上げることができた。
- ・小学生の素晴らしいプレゼンテーションにより、聴衆の方々にも日本の将来の英語教育を考える良い刺激となった。

[2] 主催団体への効果

- ・企画中には地域の方や一般学生、本校職員の方、そして滋賀県内の小学生・中学生さらには、その保護者の方々にも英語でプレゼンテーションをすることの重要性を知ってもらえた。また企画において小学生と共にプレゼンテーションを制作、発表し成功したという実績を得ることができた。

[3] 協力者への効果

- ・立命館大学生にも勝るほどの高いレベルのプレゼンテーションを小学生が披露したおかげで、大学生を刺激することができた。
- ・小学生の豊かな感性を得ることができ、大学生の思考力も上がった。
- ・第二言語である英語を用いてプレゼンテーションを行うことで、普段はできないような経験をすることができた。

◆今後の目標

・集客を増やす

→事前に地域や草津市と連絡をとってビラやポスターなどの広報を積極的に行う

・小学生英語プレゼンテーションコンテストの出場人数を増やす

→定期的に小学校とコンタクトを取り、小学生のモチベーションの向上を促す

MEMO



Refugee Dining

難民支援・研究団体 PASTEL

◆企画背景

昨年度の日本での難民申請者は、1万910人で、認定されたのは28人という少なさで認定率は、0.2%という少なさである。今年度は昨年難民申請者数を上回る早さとなっている。また、過去に遡って見ても同様のことが言える。では、なぜ、認定者数は伸び悩むのだろうか。その理由の一つとして挙げられるのが、「世論」の影響である。一般的に、難民受け入れに関するイメージはネガティブなものが多く、それが国としての閉鎖的な姿勢にも影響しているのではないかと多くの専門家は訴えている（大家、2017；滝澤・山田・佐藤、2017）。今年の5月、PASTELは難民問題に関する意識調査を立命館大学衣笠キャンパスで行い、その様子を動画に収めた。その中で「難民に関するイメージ」についてキャンパス内を行き交う学生聞いてみると、「かわいそうな人」「お金がない人」「戦争から逃れてきた人」などという消極的な意見が非常に多かった。そして、また、これらのイメージはニュース、新聞、インターネットなどのメディアを通して拡散・形成されたものによることが分かった。しかし、例えばシリア難民の多くが、紛争に巻き込まれる前は私たちとなんら変わらない豊かで平和な生活を営んでいたように、難民の中にも様々な背景を持った人たちがいる。故に、難民を一概に「貧しい人」や「困っている人」と定義づけることをしてはならない。難民は難民である前に、私たちと同じ一人の人間である。しかしながら、彼らの中には迫害を受けた過去に苦しんでいる人もおり、世論の印象と同等に、本当に貧しい人たちがいるのも事実である。その中でも、一度は、絶たれてしまった未来への希望を必死に繋ぎとめようとしている人たちも存在する。また、第三国で新しい人生を送りたいと願っている人たちがいる。そのような状況に置かれた彼らのことを、私たちは一部のメディアから伝えられた情報だけを元に判断することは本当に正しいと言えるのだろうか。私たち PASTEL は、彼ら一人一人が前向きに生きて行ける社会を創造していきたい。

本企画は「なんみんもわたしたちもパステルカラーに」を理念に掲げ、難民や日本に住むわたしたちはそれぞれ異なる個性を持っており、それぞれがその個性を認め合える日本社会になるためにはどうすればいいかということに日々活動している。日本では難民問題の認知度が低く、「難民」という言葉が持つように少し暗い、ネガティブなイメージが持たれがちである。一方で、公的支援が受けられず、日本語が難しいなど日本での生活に不安を感じ、日本に対して暗いイメージを難民の方は持っている。この現状に際し、わたしたちは、今回の Sustainable Week で「目標 10: 人や国の不平等をなくそう」を選んだ。私たちは、本企画を行うことによって、より多くの学生に難民問題について知ってもらうとともに、今後立命館大学が難民問題の解決へ具体的な行動を起こすことを促した。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|---|
| [1] | 名称 | Refugee Dining |
| [2] | 主催 | 難民支援・研究団体 PASTEL |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス内 セントラルアーク |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 4 日（水）11:00～17:00 |
| [5] | 企画内容 | <p>難民問題について、「食べて」「見て」「聴いて」知ろう</p> <p>「Meal For Refugees メニュー提供」</p> <p>「難民故郷の味」の料理を提供した。難民発生国である、ビルマ（ミャンマー）のチェッターールヒン（ビルマ風肉じゃが）、パキスタンのパンブディングを提供することによって、「食」を通して世界の難民問題について考えてもらう機会とした</p> <p>「UNHCR パネル展示」</p> <p>日本ではあまり報道されない世界の難民問題についてイメージを持ってもらうために UNHCR から直接お借りしたパネルを展示し、来てもらった方たちと会話をし難民問題の現状をお話したり、参加者の難民問題へのイメージなどをお聞きした。</p> <p>「ステージ企画クイズ」</p> <p>難民問題についてより知識を深めてもらうために、クイズ形式のステージ企画を行った。</p> |

◆企画結果

- 参加人数 100人 / 1日
- アンケート クイズ参加者を対象としたアンケートを実施
- 考察

[1] 参加者への効果

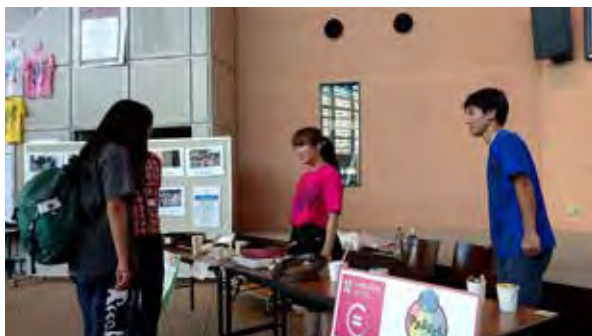
アンケートでは、難民問題について全く知らなかった方がいたが、そのような方たちがこのクイズを通して少し興味をもったと回答していただいた。また、最近よくメディアに取り上げられるロヒンギャ難民が発生しているビルマ（ミャンマー）やパキスタンの料理を提供したが、お客さんと話をしている中で、PASTEL が提供した料理が食べられている国では何が起きているのかということについて話ができ、料理をきっかけに難民問題を知れたといってくださる方もいたので、参加者の難民問題へ目を向けるよいきっかけになった。

[2] 主催団体への効果

普段団体内で難民のことについて話していると、一般の人がどれくらい難民問題に関心があるのか、どれくらい知っているのか、この問題についてどう考えているのかということが分からない為、今回の企画を通して BKC にいる学生の意識について知ることができた。今後認知啓発をしていくうえで、どのようにこの問題について説明し、知ってもらえばいいかということを見直すいい機会になった。

[3] 協力者への効果

Sustainable Week で一緒に協力していただいた方々もほとんどの方が BKC の学生や職員の方であったため、普段あまり目を向けない難民問題について知っていただけたと考えられる。



◆今後の目標

- ・自団体の学びのコミュニティ集団形成助成金がなければ赤字となっていたため
→団体の運営・経営方針について考える機会を設けなければならない
- ・アンケートの回収枚数が少なかった
→集めやすいよう箱を設けるなどする
- ・序盤、集客に苦戦
→ピラやスクリーンなどを有効活用すべきだった

MEMO



SOIL&SOUL PROJECT

SOIL&SOUL

◆企画背景

現在、世界では、グローバル化の進展や市場等の成熟に伴い、多様化している顧客ニーズや IT の発展により、激しい環境変化への対応が求められる中で、自社製品や経営資源のみだけでは、新たな価値を生み出すことが難しくなっている。そのため、これからのイノベーションの創出として外部等から技術やアイデアを取り込むことで新しい価値を創り出す、「オープンイノベーション」が重要視されはじめている。その流れの中、「問題解決型の学びを重視し学生と地域の人がキャンパスに出入りできるオープンな環境」「社会的な問題にオープンな手法で取り組み、イノベーションを起こしていく」ことを目指し、立命館大学大阪いばらきキャンパスが開設された。また、文部科学省の EDGE プログラムや COI 主催のリーンローンチパッド、立命館大学共通教育課によるコーオブ演習など、企業や大学が抱える課題を大学生にオープンにし、大学生が解決策を提案する機会が増えてきている。就職活動やインターンシップにおいても、「イノベーション人材」「新規事業創造」といった言葉が多くみられるようになってきた。我々は、立命館大学生 221 人に行った立命館大学 Sustainable Week 実行委員会の独自アンケートより、「自分の専門外の勉強や活動を行ってみたい」という学生が約 9 割を占めていること、「自分の専門分野と他の専門性を持つ人同士で連携した活動を行ってみたい」という学生も約 9 割を占めていることを明らかにした。これより、BKC 学生にとっても自分の専門を超えた連携に関心も持っていることがうかがえる。しかし一方で、同様のアンケートより「あなたは実際に、社会問題に対して学生が考える機会や解決策実践の場を活用していますか？」という問いに対し「活用している」と答えた学生は約 2 割にとどまった。その理由として、「機会がないから」が全体の 30% を占めた。さらに、「あなたの所属する学部や学科は、他学部・他学科と連携した活動に積極的だと感じますか？」という問いに対しては、積極的だと感じていない学生が約 7 割であることが分かった。このことより、依然として学部や学科を超えた連携が行われにくい体制にあることが考察できる。このことから、立命館の目指すオープンイノベーションと学生のおかれている環境にギャップがあるといえる。我々は、専門分野や組織を超えて連携する機会を BKC 大学生に提供すれば、学内におけるオープンイノベーションが加速されるのではないか、という仮説のもと、学内で志をもって活動している団体や顕著な実績をあげている団体を複数集め、参加団体間でオープンな「学内異業種交流会」を開催する。今回 Sustainable Week に参加する多くの団体がそれぞれ SDGs の 17 個の目標に合ったこれまでにないまったく新しい試みを実施する予定である。本イベントにおいて、こうした団体同士の連携を強化し、学生間・学生と大学間のイノベーションを創出することを狙いとした。本企画は SDGs における「17: パートナリーシップで目標を達成しよう」を掲げ、Sustainable Week に参加する多くの団体同士をつなげ、相乗効果を生み、組織の枠を超えた連携を通して、最終的にそれらの関係性すらも持続可能であるように、ここでのつながりが個々人の今後のみならず団体としての今後に大きく貢献しうるようなプラットフォームを構築、提供することを目的とした。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|---|
| [1] | 名称 | SOIL&SOUL PROJECT |
| [2] | 主催 | SOIL&SOUL |
| [3] | 実施場所 | セントラルアーク |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 5 日 (木) 15:00 ~ 18:00
10 月 6 日 (金) 15:00 ~ 18:00 |
| [5] | 企画内容 | Sustainable Week に参加する団体のそれぞれが自団体の紹介に加えて、本イベントにおける SDGs への取り組みや今後のビジョンをプレゼンする。
「第 5, 6 回 SOIL&SOUL PROJECT」
「興味深いこと検索エンジン」
Sustainable Week に参加する団体が SOIL&SOUL にも参加して、これまでの活動や Sustainable Week における取り組みの予定を他の参加団体ならびに一般学生にプレゼンした。 |

◆企画結果

■参加人数 40人 / 2日

■考察

[1] 参加者への効果

・自身がやりたいと思える興味深いことが見つかる。時期に依らず団体に加入することができる

[2] 主催団体への効果

・より多くの団体が参加することで学内プラットフォームとして知名度があがる

[3] 協力者への効果

大学：学生の正課外活動の活発化

地域：学生の正課外活動について直接知ることができる

連携団体：自団体についての情報発信や大学、地域、企業、他団体、一般学生とのパートナーシップ創出
どの協力者にも協力者自身の今後の活動が円滑になる。



◆今後の目標

・セントラルアークでのプレゼン

→動画や画像を主体としたプレゼン資料の作成を依頼した。

・各団体のプレゼン資料提出の遅延

→夏期休暇中からの代表者との定期的な連絡に努めた。

MEMO



ゴミ箱アート

新演劇研究会劇団月光斜 Team BKC

◆企画背景

立命館大学びわこくさつキャンパスは 1994 年の開設から今年で 23 年がたち、学内の様々な設備が更新の時期またはメンテナンスの時期に差し掛かっており、これからそれらの課題に対処していかななくてはならない。身近なところでは金属でできた公園の遊具が腐食し破損して子供に怪我を負わせてしまうなど、もはや公的施設の老朽化は対岸の火事などではなく実際に身近に迫った問題となってきた。学内においてもゴミ箱の塗装が寿命をすでに過ぎており、チョーキング現象の発生やさびによる腐食など一刻も早くメンテナンスをすることが望まれる状況である。また、設備のメンテナンスおよび更新をするにあたって問題となるのはコストと人員、それに更新の場合は一時的な設備の使用停止である。設備の使用停止は長期間になるほど社会的影響が大きくなっていくことから設備の停止期間が短くなるメンテナンスまたは、計画的なリプレイスが重要である。さらにコストに関しては、わが国の財政状況を鑑みるに老朽化した設備をすべて更新してゆくことは不可能であり、いかに適切にメンテナンスをしライフサイクルコストを下げ、現状を維持してゆくかが大きな課題である。そこで使用者自身がメンテナンスに対して積極的に関わっていくことでトータルコストの削減などにつながるのではないかと考えた。また、使用者がインフラに目を配るようになることでインフラの老朽化に早いタイミングで気が付くことが出来、適切なメンテナンスが実行できることで設備の延命をすることが可能になる。

本企画は SDGs における「12: つくる責任つかう責任」に対して、劇団月光斜の持つ自前主義を用いてゴミ箱のリノベーションに取り組み、使用者がメンテナンスに積極的にかかわってゆく先例にすべきとした。

◆企画詳細

[1]	名称	ゴミ箱アート
[2]	主催	立命館大学新演劇研究会劇団月光斜
[3]	実施場所	立命館大学びわこ・くさつキャンパス内
[4]	日時	2017 年 6 月 30 日（金）より常設
[5]	企画内容	ゴミ箱の再塗装

◆企画結果

■考察

- ・ゴミ箱壮観の美化
- ・メンテナンスの実行による機能の回復
- ・チョーキング現象による衣服等への汚損被害の軽減

MEMO

参加団体活動について 協賛企画一覧

協賛企画について	47
後援・協賛団体一覧	47
Sustainable Week with Dari K（協賛企業：Dari K 株式会社）	48, 49
滋賀県庁×立命館大学教職員×立命館大学生 SDGs 合同ワークショップ（協賛自治体：滋賀県）	50, 51
Sustainable Week プレイベント「立命館大学生と考える SDGs」（協賛自治体：草津市 / UDCBK）	52, 53
Sustainable Week 事後アンケート	54-56
Sustainable Week メディア掲載実績	56
SDGs 体験型イベント Sustainable Week を実施して 学校法人立命館へのお願い	57

◆協賛企画について

Sustainable Week では、日本初の大規模な学生による SDGs イベントということで、滋賀県内の SDGs に関心のある様々な行政機関や企業、そして立命館大学内の機関に後援・協賛を行っていただきました。

協賛企画については、Sustainable Week の考え方に賛同していただいた団体・企業と共に、大学生、そして来場者に滋賀県・京都府の SDGs に関心のある団体について知ってもらうことと、その取り組みについて知ってもらうことを目的に Sustainable Week 実施中に活動を行いました。

◆後援・協賛団体一覧

< 後援団体 >

立命館大学

滋賀県

草津市

近江八幡商工会議所

立命館地球環境委員会

立命館サステイナビリティ学研究センター



< 協賛団体 >

株式会社日吉

たねやグループ

Dari K 株式会社



たねや

Sustainable Week with Dari K

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

◆企画背景

Dari K 株式会社のインドネシアでのカカオ栽培の取り組みは 5 つの SDGs(1, 2, 8, 13, 15) に基づいている。この度、SDGs を社会的事業として取り組む企業として Dari K 株式会社と Sustainable Week が連携する機会を頂いた。Sustainable Week は一つの企画としては成り立っているが、企画から別企画への人の動線が作られていない部分が弱みであったため、イベントの回遊率を上げるために、Dari K 株式会社と取り組んでいる 5 つの SDGs に基づく企画を地点としてスタンプラリーを実施した。

Sustainable Week にて実施された各企画は一時的な催しだからこそ可能であり、持続可能な企画ではない。そのため、SDGs への取り組みが持続可能であることを、具体例を挙げて学生に伝える必要があった。そこで、SDGs がビジネスにおいても取り組み可能であることの実例として Dari K 株式会社と連携した。

本企画は株式会社 Dari K が取り組む「インドネシアでのカカオ栽培」に関する活動が SDGs に基づいていることを参加者に周知するとともに、Sustainable Week のイベントの回遊率の向上を目的として実施された。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | Sustainable Week with Dari K |
| [2] | 主催 | 立命館大学 Sustainable Week 実行委員会 |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス 各企画の実施場所 |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 1 日（日）～10 月 6 日（金） |
| [5] | 企画内容 | <p>Dari K 株式会社が取り組む「インドネシアでのカカオ栽培」に関する活動に紐づく 5 つの SDGs (1, 2, 8, 13, 15) を達成する 4 つの企画を回った参加者に株式会社 Dari K の商品を提供する。(スタンプラリー形式) EMH プロジェクトの企画「ZEH に住もう」の企画場所で抽選を行い、景品の受け渡しを行う。</p> <p>下記、4 つの企画において株式会社 Dari K の取り組みを紹介するポスターを掲示して頂き、Sustainable Week 実行委員会のコアメンバーが当日張り付けて紹介を行う。企画に参加し、さらに説明を受けた参加者にスタンプを押す。</p> <p>10 月 2, 3 日：0 円食堂 「2. 飢餓をなくそう」「15. 陸の豊かさを守ろう」</p> <p>10 月 2, 3 日：学生よ、大志を抱け - 学べ、起業家精神 - 「8. 働きがいも経済成長も」</p> <p>10 月 4, 5 日：満腹で幸せに！～ cooking of merci ～「1. 貧困をなくそう」</p> <p>10 月 5, 6 日：ZEH に住もう 「13. 気候変動に具体的な対策を」</p> <p>企画を 1 つでも回り終えた人に、抽選で 10 名に景品を渡す。場所はネット・ゼロ・エネルギー・ハウスが展示されているトリシア周辺。</p> <p>全体を通して、約 10-20 名がクリアし、景品を渡すことを想定している。</p> <p>スタンプ台紙の裏にアンケートを載せ、Sustainable Week としての成果を測った。</p> |
| [6] | 協賛 | Dari K 株式会社 |

◆企画結果

■参加人数 25 人（300 枚配布）

スタンプラリー用紙を開会式・0 円食堂で配布したため、配布数は 300 枚に至ったが、実際に最後まで回った参加者は 25 人と全体の 8% であった。

■考察

[1] 参加者への効果

- ・スタンプラリーをきっかけに SDGs について知る機会を得られた（アンケート結果より）
- ・企画を回することで株式会社 Dari K の高級チョコレートをゲットすることができる（アンケート結果より）
- ・SDGs の取り組みという切り口から社会的に価値の高い製品の購入という消費者の行動変容が見込まれる

[2] 主催団体への効果

Sustainable Week の参加人数の確保、及び、SDGs に対する強い興味を持つ学生の発見

[3] 協力者への効果

- ・社会的事業における SDGs の取り組みを参加者に発信することができた
- ・企業と学生が SDGs をもとに連携する先進的な例となった



◆今後の目標

- ・参加者の数が少なかった。

→周知不足。イベント直前に決まったことなので、一般の参加者には周知させるのが困難であった。しかし、実行委員だけでも周知させるべきであった。

- ・宣伝や抽選方法など企画に準備不足が見られた

→スケジュール的に企画を行うことが厳しいまたは詰めきれられない場合は、相手側に迷惑がかかることも考えて辞退することも検討する

◆協賛企業概要

- | | | |
|-----|----|---|
| [1] | 名称 | Dari K 株式会社 |
| [2] | 代表 | 代表取締役 吉野慶一 |
| [3] | 概要 | カカオ豆／カカオマスの輸入・卸チョコレートおよび菓子の製造・販売 上記に付随する食品健康食品などの企画・製造・販売 |

滋賀県庁職員×立命館大学教職員×立命館大学生 SDGs 合同ワークショップ

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

◆企画背景

2017 年、我々 Sustainable Week 実行委員会は、SDGs をもとに 27 の学生団体とともに活動を行った。“BKC を小さな地球と捉える”という Sustainable Week のコンセプトをつくる際、我々は国連の定める SDGs に対して、Sustainable Week 独自の具体的な評価基準を作ることに苦労した。例えば、SDGs 「1. 貧困をなくそう」において行動するならば、まず BKC において何を貧困とするのかの定義を明確にすることが重要である。定義が曖昧であれば、BKC が抱える問題を適切にあぶりだすことができず、具体的な解決策を見出すことができないからだ。この話を受けて今回、滋賀県総合政策部企画調整課様から立命館大学の職員の方々、Sustainable Week 実行委員会のメンバーとともに、SDGs について滋賀県オリジナルの目線から議論するきっかけを頂いた。そこで我々は、滋賀県が抱える現状の課題と SDGs についての知見、学校法人立命館が約 20 年かけて構築してきた持続可能なキャンパスづくりに関する思考方法と経験、そして Sustainable Week 実行委員会のメンバーが持つ、理想の社会像や現状・将来の不安などの率直な意見を掛け合わせ、今後の滋賀県がいかにかうまく SDGs を活用して持続可能性を築き上げていくか、その取り組みを充実させるために話し合いの機会を設けた。

本企画は滋賀県庁職員、立命館大学教職員、Sustainable Week 実行委員会によるワークショップにより滋賀県が目指すべき未来を、SDGs を用いて達成する方法を提案するとともに、滋賀県庁職員、大学教職員、学生のつながりを作ることで、幅広い視点を持ち、また今後の活動の幅を広げるきっかけを作ことを目的として実施された。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|--|
| [1] | 名称 | 滋賀県庁×立命館大学教職員×立命館大学生 SDGs 合同ワークショップ |
| [2] | 主催 | 立命館大学 Sustainable Week 実行委員会 |
| [3] | 実施場所 | 立命館大学びわこ・くさつキャンパス セントラルアーク 1F |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 1 日 (日) 10:00 ~ 12:00 |
| [5] | 企画内容 | <p>○タイムスケジュール</p> <p>10:00 ~ 10:15 「SDGs とは」 滋賀県庁職員によるプレゼンテーション</p> <p>10:15 ~ 10:20 Sustainable Week 実行委員会によるワークショップの説明</p> <p>10:20 ~ 11:30 グループディスカッション</p> <p>11:30 ~ 12:00 発表 (各チーム 5 分)</p> <p>12:00 ~ 12:30 ランチタイム & 交流大会</p> <p>○グループディスカッション詳細</p> <p>・自己紹介 (5 分) ・学生の活動報告 (10 分) ・教職員・県職員からのコメント (10 分)</p> <p>・意見交換 (35 分) ・発表に向けてまとめ (10 分)</p> <p>○SDGs17 のゴールから、ワークショップのテーマを設定</p> <p>Sustainable Week 実行委員会コアメンバーが実施企画を考慮して以下 6 つのテーマを決定</p> <p>2. 飢餓をゼロに / 4. 質の高い教育をみんなに / 5. ジェンダー平等を実現しよう</p> <p>9. 産業と技術革新の基盤をつくろう / 14.15. 海の豊かさを守ろう、陸の豊かさを守ろう</p> <p>17. パートナリシップで目標を達成しよう</p> <p>○ワークショップのチーム分け</p> <p>上記参加者を計 6 チームにグループ分ける。</p> <p>各チーム 立命館大学 Sustainable Week 実行委員会：3 名 / 滋賀県職員 2~3 名 / 立命館大学教職員 1 名</p> |
| [6] | 協賛先 | 滋賀県庁、立命館大学 |

◆企画結果

- 参加人数 42人 / 1日
- アンケート ワークショップ参加者を対象としたアンケートを実施
- 考察

[1] 参加者への効果

- ・それぞれの団体の特徴を活かした視点から深められていた。(立命館大学教職員)
- ・普段聴くことのできない視点の意見を聞けて、いつもとは違う視点から考えることができ、よかった。(立命館大学生)
- ・同じテーマで取り組んでいる学生の皆さんと、是非一緒に何かできればと思います。(滋賀県庁職員)

[2] 主催団体への効果

- ・実際の県の実態を交えながら理想に対してどのようにアプローチしていくか考えていけたのが、非常に面白かった。また、いままで考えていなかったような問題やすでに手が打たれているものについて知ることができた。(立命館大学生)
- ・学生の考える希望に対し、現実的にそれが実行可能なのかという視点から意見をいただいたため、よかったと思う。(立命館大学生)
- ・滋賀県での課題を共有することによって、課題解決に向けた行動に取り組めるのではないかと考えた。(立命館大学生)

[3] 協力者への効果

- ・大学側としても、もっと積極的に教職員と学生とが繋がる場を作り、学生の生の声を聞くべきだと思った。(立命館大学教職員)
- ・大学生と意見交流する機会はあまりないので、大変貴重な機会をいただけたと感じた。(滋賀県庁職員)
- ・自らの活動を通じて感じる問題意識、解決方法等について、自分なりの言葉で説明できることに感心した。(滋賀県庁職員)



◆今後の目標

- ・「時間が少なかった。」「有意義な意見交換が出来なかった。」等の時間内に解決できなかった参加者の不満
→滋賀県庁・立命館大学とコンタクトをとって長期的な活動を行う

◆協賛自治体概要

- | | | |
|-----|----|---|
| [1] | 名称 | 滋賀県 |
| [2] | 代表 | 三日月大造 知事 |
| [3] | 概要 | <p>滋賀には、地域を支え合う多彩な人、未来を創造する技術やノウハウ、誇れる歴史・文化、滋賀の発展を支える地の利、豊かな自然といった素晴らしい力があり、それらを地域の皆さんと共に高め、次の世代に引き継いでいきたいと考えています。目指すは「夢や希望に満ちた豊かさ実感・滋賀」。今だけ、モノだけ、自分だけ、お金だけではなく、誰もが将来も持続的に心で実感できる「新しい豊かさ」をつくっていきます。</p> |

Sustainable Week プレイベント 「立命館大学生と考える SDGs」

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

◆企画背景

2017 年 10 月に立命館大学びわこ・くさつキャンパス内で実施された Sustainable Week に参加する団体が日本で初めての学生主催による SDGs 体験型イベントを企画した。さらに、実施に至るまでのプロセスとこれからの各団体の活動を社会、地域、市民に向けて発表する機会を創出することを目的として UDCBK（アーバンデザインセンターびわこ・くさつ）を利用した。社会、地域、市民に SDGs を発信する目的は、「No One Will Be Left Behind.（誰一人取り残さない）」、つまり学生だけにとどまらず、社会から地域市民まで誰一人も残さずに巻き込み、経済、社会、地球環境をめぐる広範な課題解決と持続可能な社会を形成する基盤をつくることである。

本企画は UDCBK で「Sustainable Week 実行委員会が SDGs の説明、Sustainable Week の紹介を行うことで 10/1 からの市民の方々の集客率の向上を図ることを目的として開催した。さらに、Sustainable Week 当日のデモンストレーションとして、試作を用いた企画の実施を別会場 (FeriE 5F) で料理提供グループの料理の試食を行った。

◆企画詳細

[1]	名称	立命館大学生と考える SDGs
[2]	主催	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会
[3]	実施場所	UDCBK（アーバンデザインセンター びわこくさつ）、FeriE 南草津 5 階調理室
[4]	日時	2017 年 9 月 16 日（土）11:00 ～ 13:00
[5]	企画内容	SDGs の紹介、料理提供団体の料理提供
	10:00	UDCBK 集合（全員）
	10:00-10:15	当日の流れ最終確認（全員）→調理グループは FeriE へ
	10:15-10:45	会場設営 & プレゼン準備（実行委員会、REFLE. メンバー）
	10:45-11:00	開場
	11:00-11:10	UDCBK の紹介 (UDCBK シニアディレクター溝内さん)
	11:10-11:50	SDGs、Sustainable Week の紹介と社会実験事前調査事業の案内 (実行委員長：馬場、UDCBK 担当：亀石)
	11:50-12:00	アンケート記入
	12:00-13:00	参加者 FeriE に移動、試食・意見交流会
	13:00-14:30	片付け & 反省会

◆企画結果

- 参加人数 21人 / 1日
- アンケート 参加者である一般市民を対象としたアンケートを実施
- 考察

[1] 参加者からのコメント

- ・クイズゲームが面白かった。実行委員長のスピーチがよかった。(30代女性)
- ・大学生がこんなに大きい世界規模の取り組みを進めていることが素晴らしいと思った。そんな大学生の姿を子供が見て、自分もこんな大学生になりたいと思ってほしい。(30代女性)
- ・立命館大学を地球に見立ててという分かりやすい取り組み。とにかく行動を起こして、モデルをつくるという志がとても頼もしく感じた。(50代女性)
- ・今回初めてSDGsの内容について学んだが、社会問題を考える際の切り口、ツールとして有用でもっと多くの場面で活用していけるのではないかと思った。(30代男性)

[2] 主催団体への効果

- ・参加団体の認知
- ・Sustainable Weekの認知
- ・市民との交流・繋がりを持てた
- ・企画実施団体が企画内容や問題意識についてプレゼンテーションする機会の創出
- ・社会問題を様々な視点から考える機会になった

[3] 協力者への効果

UDCBKは、草津の未来のまちのデザインを考えるために、大学（教職員や学生）、企業（経営者や通勤者）、行政（国や県や市の職員）の人々が、草津に住む市民の方々と気軽に自由に話し合い、交流する場所であることから、本企画において大学生と市民の交流の場になったことで、その役割を果たせた。



◆今後の目標

- ・準備が直前までに及んだこと
- 何が必要かをリストアップして、段取りを立てて準備する

協賛自治体概要

- | | | |
|-----|----|--|
| [1] | 名称 | アーバンデザインセンターびわこ・くさつ |
| [2] | 代表 | 及川 清昭 センター長（立命館大学 理工学部 教授） |
| [3] | 概要 | 草津の未来のまちのデザインを考えるために、大学（教職員や学生）、企業（経営者や通勤者）、行政（国や県や市の職員）の人々が、草津に住む市民の方々と気軽に自由に話し合い、交流する場所です。その話し合いの中で見つけた未来の草津の課題について学習し、大学や企業の専門家と連携し、未来の選択肢を増やす調査研究や社会実験を行っています。 |

参加団体活動について

Sustainable Week 事後アンケート

◆アンケート概要

[1]	目的	本調査（アンケート）は Sustainable Week に参加した企画実施団体の、SDGs に対する意識変化や課題点を明らかにし、今後の Sustainable Week 及び関連活動の参考にすることを目的とした。
[2]	調査期間	2017 年 10 月 15 日～2017 年 10 月 30 日
[3]	調査方法	参加団体への Web アンケートフォーム送信、並びに回答
[4]	調査対象	Sustainable Week 参加団体（有効回答数 110 人）
[5]	実行元	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会

◆アンケート結果要約

< SDGs の認知度 >

Sustainable Week を実施し、SDGs を理解している企画実施学生が開催以前の約 3 倍に増加したことは、本イベントの非常に大きな成果である。また、世界の課題を自分の問題意識に落とし込み、「あるべき社会の姿」や「持続可能性」について考えることができた学生が約 7 割を占めたことから、企画を運営した学生の約 7 割に対しては成果があったと言える。（学生のミッション達成も同様）

< 企画 >

人気を集める企画として、次の要素があげられる。

普段の生活ではあまり体験できないもの / 動線がうまく決まっており、企画体験時間が長くないもの / 手に取って自分で動かしやすいもの、ターゲット層が広いもの / 開催時間・場所（お昼休み、みんながよく通る場所・人が多く集まる場所） / 企画運営の団体数が増えるほど、部員や友達が見に来る→集客数の増加につながる（行列効果）

< 参加団体のメリット >

Sustainable Week のそれぞれの企画を数多くの団体が担うことで、外部発信の機会や他団体との交流の機会が増加する。そのため、「参加団体の認知向上」「他団体との関係性を築くことができた」が 70%以上を占めた。

< 改善点 >

ほとんどの団体が企画を遂行することに必死だったため、参加者へ向けた SDGs の説明や問題意識の訴えが十分に行えていなかった。そのため、誰でも企画を行う意味を説明できるような仕組みづくりが必要である。

- ①要点をまとめた説明テンプレを作成する。
- ②各団体が外部に対して企画を発表する機会を増やす。
- ③団体を巻き込む時点で、団体の幹部だけでなく部員にまで SDGs を説明しておく。

以上の対策を行うべきだった。

状況、情報の透明化（全体スケジュールと各団体の進捗が一目でわかるような仕組みづくり）が必要である。そのため、

- ①使用できる施設や機材の事前把握
- ②依頼する作業（企画書や報告書、ミーティング参加など）を事前にリスト化する。
- ③連絡ツールの使い方を周知する
- ④幹部→団体の企画代表→各団体のメンバーへ情報をおろす
- ⑤団体同士の連携・交流の促進をはかる（決起会やワークショップなど）

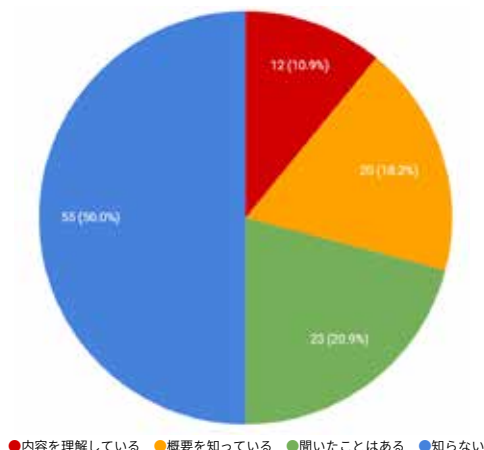
以上の対策を行うべきだった。

◆アンケート結果要約 続き

＜ Sustainable Week への参加を最終的に決めた理由＞

Sustainable Week のコンセプトに共感したため。 / SDGs について興味を持ったから / 社会問題に関わる企画をすることが自団体にとって今後良い経験になると思ったため / いくつかの音楽団体と協力して目標を達成するということが今までになかったから / 今までの活動をアウトプットできる場だと思ったから / 新たな分野への (学生への運動指導) 挑戦 / 他の団体の参加意欲に刺激させられた / 団体としての参加が決まったから / 団体の認知度を上げるため

＜ Sustainable Week への参加前 / 後での SDGs の理解度＞



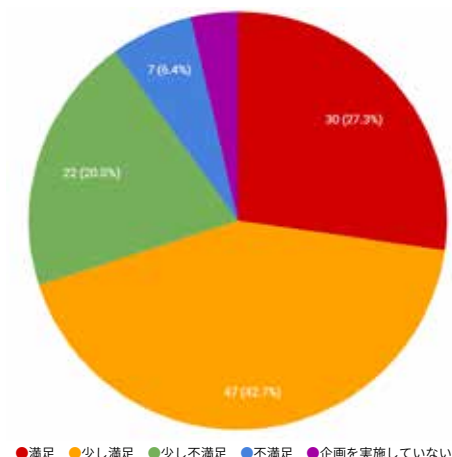
Sustainable Week 参加前の理解度



Sustainable Week 参加後の理解度

＜ 自団体の Sustainable Week での企画実施後の満足度とその理由＞

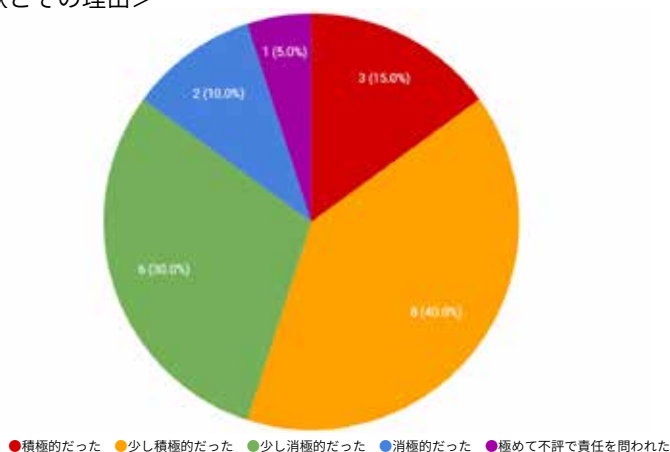
- ・楽しかったから
- ・いつもと違う企画を実施できたことは良い経験になった
- ・周りの評価が高かったから
- ・当初の内容通りに実施できたから
- ・自分のサークルでやりたいことができたから。
- ・当初の予定とは別ようになってしまったため
- ・初めの動き出しが遅く、他の団体に迷惑をかけたから。
- ・伝えたい事が伝わったかは分からない。
- ・持続可能性に関する企画だったのかと疑問に思う
- ・一般学生の巻き込みが足りなかった。



●満足 ●少し満足 ●少し不満足 ●不満足 ●企画を実施していない

＜ 自団体の部員の Sustainable Week の企画への参加意欲とその理由＞

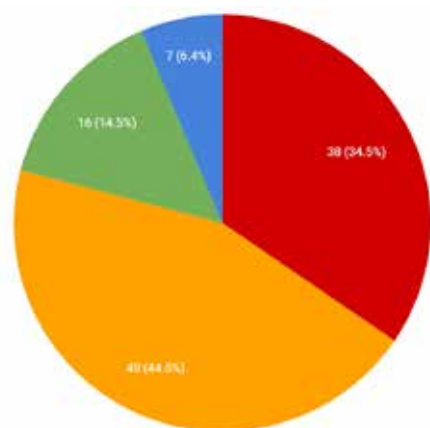
- ・参加するメンバー間で多くの情報を共有したため。
- ・協力的なミーティング参加や、案を出してくれた。
- ・メンバーのやる気を持続させながらやったから
- ・企画に多くのサークル員が観に来てくれたから。
- ・非日常的な体験だから
- ・押し付けられている感が強かったから
- ・例会がないため、連絡がまばらになってしまったから
- ・1 回生と 3 回生の編成なので熱意に差があった。
- ・自分があまり部員を巻き込まなかったため。
- ・研究や他の活動で忙しかったから。



●積極的だった ●少し積極的だった ●少し消極的だった ●消極的だった ●極めて不評で責任を問われた

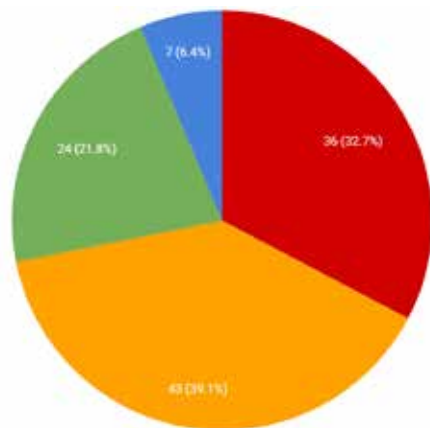
◆アンケート結果要約 続き

< Sustainable Week への参加前 / 後での SDGs の理解度 >



● 関心がある ● 少し関心がある ● あまり関心がない ● 関心がない

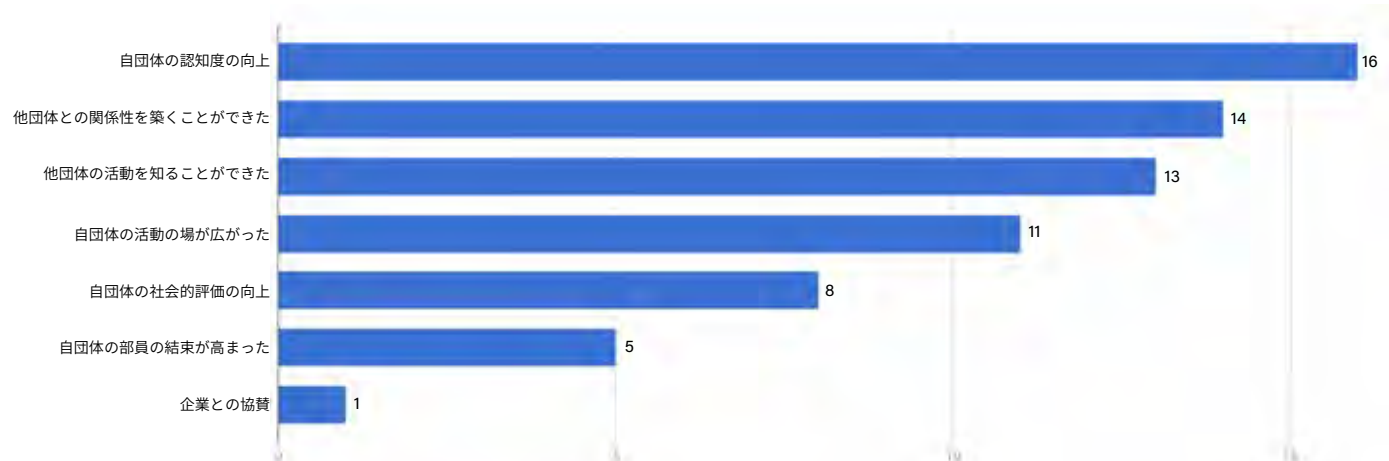
世界規模の問題と SDGs とのつながりへの関心



● 関心がある ● 少し関心がある ● あまり関心がない ● 関心がない

大学や地域など身近な問題と SDGs とのつながりへの関心

< Sustainable Week に参加する団体が得られるメリット >



Sustainable Week メディア掲載実績

※ 2018 年 3 月時点

2017 年 7 月 21 日	立命館大学新聞 『Sustainable Week』BKC で 10 月開催 学生団体が社会問題解決をテーマにイベント開催」 掲載
2017 年 8 月 4 日	京都新聞「おいしく外来魚駆除、学生が企画 滋賀・守山」 掲載
2017 年 9 月 1 日	朝日新聞発行「SDGs ACTION!」 掲載
2017 年 9 月 16 日	毎日新聞「持続可能な社会実現へ 立命館大生主催 体験型イベント」 掲載
2017 年 9 月 16 日	京都新聞「『SDGs 考えて』学生が発信」 掲載
2017 年 9 月 29 日	中日新聞「『持続可能な開発目標』10 月 1 日から催し 草津の立命館大」 掲載
2017 年 10 月 4 日	毎日新聞「草津・立命大 BKC で 性的少数者に理解を 学生ら展示や冊子配布 6 日まで」 掲載
2017 年 11 月 9 日	びわ湖放送「しがエネルギームーブメント」 特集動画出演
2017 年 11 月 9 日	びわ湖放送「6 時だよ！知ったかぶりカイツブリにゅーす」 特集動画出演
2017 年 11 月 17 日	立命館大学新聞「BKC から社会問題を解決：Sustainable Week が開催」 掲載
2017 年 11 月 20 日	NHK ラジオ第 1 「旅ラジ」 出演
2018 年 1・2 月号	滋賀県広報誌「滋賀＋1」 掲載

SDGs 体験型イベント Sustainable Week を実施して 学校法人立命館へのお願い

日本初！学生主催による SDGs 体験型イベント「Sustainable Week」を開催できたことに大変感謝しております。特に、私たち学生が SDGs(Sustainable Development Goals) に関心を持ち活動を実施する中で、本学の「2017 年度学びのコミュニティ集団形成助成金」に採択されたことで活動が現実的なものになりました。しかし、Sustainable Week を開催するにあたって、大学のキャンパスだけではなく、地域を巻き込んだ取り組みの必要性を感じました。その規模を大きくする際に、立命館地球環境委員会、立命館サステナビリティ学研究センターのご支援によって BKC 初の学生主体による地域を巻き込んだムーブメントになったと思います。今回、Sustainable Week の活動報告書を作成するにあたって Sustainable Week の成果、反省を体系的にまとめることで、これから BKC 以外のキャンパス、もしくは、他大学のキャンパスから社会をよりよくするムーブメントが起こる仕組みを展開したいと思います。そのために、今回、Sustainable Week の成功の要因、さらに学園として取り組んで頂きたいことを簡潔にまとめています。

◆ Sustainable Week の成功要因

- ① SDGs という共通の目標に対して、学生、教員、職員、地域住民など多くの方が関心を持ち、そこから実際の行動に移すことができた点
- ② SDGs の 17 個のゴールそれぞれに特化するのではなく、初めから全てを網羅しながら参加団体を集めたことで、多くの参加者の興味・関心を引きつけることができた点
- ③ 企業や行政、大学などで SDGs への取り組みを試行錯誤している中で、学生団体等の活動を SDGs という指標に集約し、対象をキャンパスにしばることなく、地域（滋賀県や草津市）を巻き込んだイベントにできた点

一方で、このような活動に取り組む中で、有識者や身近な学生等からの意見を踏まえ、切実な課題も見えてきました。欧米に比べて取り組みが広がっている日本国内の SDGs を Sustainable Week で継続的に取り組むにあたって学校法人立命館にお願いしたいことが以下の 3 点です。

◆ Sustainable Week を持続的な取り組みするためのお願い

- ① 小中高大連携をして、SDGs に取り組むことを明確にしてほしい
- ② Sustainable Week を資金面、運営面で持続可能な取り組みとするために、立命館地球環境委員会の傘下にしていただき、さらに専門の教職員の方を配置してほしい
- ③ 大学として SDGs に取り組むにあたって SDGs に準じたシンポジウム等を開催してほしい

実際にこれまで活動を行ってきた中で私たちが切実に感じた課題を踏まえ、これから 5 年、10 年先の学校法人立命館のあるべき姿を実現するために、提言できていると信じます。引き続き、これからの未来を生きる本学の学生の活動にご協力、並びに、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

平成 29 年度 UDCBK 社会実験事前調査事業

◆社会実験事前調査事業とは

草津市は、立命館大学びわこ・くさつキャンパスが立地し、多くの学生が学ぶ学園都市である。また、市内外の 6 大学と包括協定を締結して、大学の持つ知的財産や人材、学生の力といった資源をまちづくりの中に取り入れる大学を活かしたまちづくりを進めている。

今回、草津市は平成 28 年度に産学公民連携のプラットフォームであるアーバンデザインセンターびわこ・くさつ（以下、UDCBK）にて実施したワークショップ等での市民からの提案を参考に市が設定したテーマについて、データに基づく政策の必要性、実現するために必要な制度設計、効果を検証するための社会実験計画の策定などを検討する包括協定締結大学の団体を募集した。その中で、立命館大学は、2017 年 10 月に BKC 内で実施される SDGs 体験型イベント Sustainable Week を企画した団体が採択された。学生団体が SDGs に絡めた企画を実施に至るまでのプロセスと Sustainable Week に参加した団体の活動を社会、地域、市民向けに発表する機会を創出することを目的として UDCBK を活用した。

（平成 29 年度 UDCBK 社会実験事前調査実施要項より）

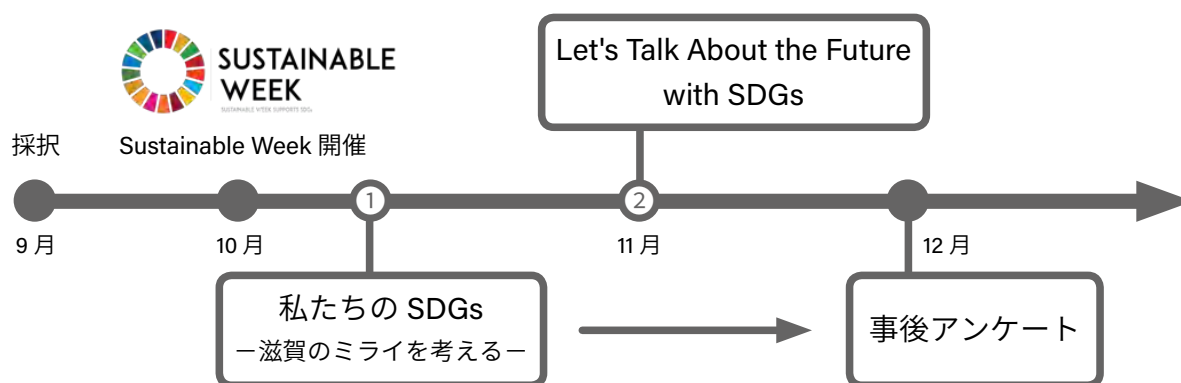
◆本事業の目的

本事業では Sustainable Week を踏まえ、UDCBK にて、市民とともに SDGs について考える機会を創出し、そこから市民の生活に SDGs の考え方がどのように浸透していくのかを調査した。SDGs の考え方の根底は「No One Will Be Left Behind.」である。学生だけにとどまらず、社会から地域市民まで誰一人取り残さずに巻き込み、経済、社会、環境をめぐる広範な課題解決と持続可能な社会を形成する基盤をつくるべく、社会、地域、市民へ SDGs を発信することを第一の目的とした。また、どのような取り組みが市民や学生の関心や興味を引くのかを明らかにすることを第二の目的とした。さらに市民だけでなく、開設から約 1 年が経つ UDCBK を今後学生が積極的に利用できるような場所にするを第三の目的とした。

◆企画概要

- ① 私たちの SDGs — 滋賀のミライを考える —
市民と学生が滋賀の未来について絵を描き、サイコロオブジェを製作するワークショップ
- ② Let's Talk About the Future with SDGs
留学生や在住外国人と学生が SDGs に沿った身近な問題や課題解決についてディスカッション

◆企画開催までの流れ



アーバンデザインセンターびわこ・くさつ（UDCBK）

センター長 及川 清昭（立命館大学 理工学部 教授）

草津の未来のまちのデザインを考えるために、大学（教職員や学生）、企業（経営者や通勤者）、行政（国や県や市の職員）の人々が、草津に住む市民の方々と気軽に自由に話し合い交流する場所です。その話し合いの中で見つけた未来の草津の課題について学習し、大学や企業の専門家と連携し、未来の選択肢を増やす調査研究や社会実験を行っています。

私たちの SDGs — 滋賀のミライを考える —

立命館大学 Sustainable Design Lab.

◆企画目的

2017 年 10 月に立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて日本初の SDG 体験型イベント Sustainable Week が開催された。本イベントに参加した団体が、イベントの実施に至るまでの過程と自団体の活動を社会、地域、市民向けに発表する機会を創出することを目的として UDCBK（アーバンデザインセンターびわこ・くさつ）にて、市民向けの SDGs 啓発イベントを開催した。ここで、学生が社会、地域、市民に向けて SDGs を発信する目的としては、「No One Will Be Left Behind.」、つまり学生だけにとどまらず、社会から地域市民まで誰一人も残さずに巻き込み、経済、社会、環境をめぐる広範な課題解決と持続可能な社会を形成する基盤をつくるためである。

本事業では、SDGs サイコロオブジェの製作を用いたワークショップを行う。SDGs と Sustainable Week の象徴としてオブジェを参加者全員で製作し、社会・地域・市民に対して SDGs を身近なところから考えることを本事業の目的とする。

◆企画詳細

- | | | |
|-----|------|---|
| [1] | 名称 | 私たちの SDGs — 滋賀のミライを考える — |
| [2] | 主催 | 立命館大学 Sustainable Design Lab. |
| [3] | 実施場所 | アーバンデザインセンターびわこ・くさつ |
| [4] | 日時 | 2017 年 10 月 4 日（水） 18 時 30 分～20 時 00 分
2017 年 10 月 7 日（土） 11 時 00 分～12 時 30 分（第 1 部）
14 時 00 分～15 時 30 分（第 2 部） |

- [5] 企画内容

選んだ達成目標において、実現してほしい滋賀の未来像を描き、その絵を側面に貼った SDGs サイコロオブジェの製作を行う。



○タイムスケジュール

- ①イントロダクション（15 分）
- ②グループ内でのファシリテーター（Sustainable Week 参加団体代表者）による達成目標の説明
団体紹介と Sustainable Week 期間中の企画紹介（15 分）
- ③画用紙に絵をかき、描いた絵をサイコロに貼り付け（30 分）
- ④各グループの発表（25 分）
- ⑤写真撮影、アンケート（5 分）

◆企画風景



◆調査結果

(1) 調査方法

アンケートは質問用紙での回答とオンラインでの回答の2つの方法で実施した。

10月の企画では企画実施直後に質問用紙でのアンケートを実施した。2か月後に事後調査として、SDGsが企画参加者の生活にどの程度浸透したのかオンラインでアンケートを実施した。11月の企画では企画実施直前と直後に、オンラインによるアンケートを実施した。

(2) 調査結果①（「私たちのSDGs」参加者へ実施した調査）

調査日：10月4日（水）、10月7日（土）

回答数：39件

回答者の約60%が草津市在住であった（図1）。一方で、同じくこの企画に参加した学生が回答者の53%を占めている（図2）。社会、地域、市民に浸透させていくことが本事業の目的の一つであったが、学生の回答が約半分を占めているのは広報等での課題があったと認識している。参加動機に、「SDGsに関心があるから」と回答したのは39人中23人であった（図3）。さらにその回答をした人のうち学生以外が半分であった。このことから、地域でのSDGsに対する関心は決して低くはなかったといえる。また、今回の企画が今後に活かせるかどうかの質問に対して、回答者全員が「大いに活かせると感じた」「いづらか活かせると感じた」と回答した（図4）。企画の最初に参加者に対してSDGsの説明プレゼンを行ったが、そこで自分たちの普段の活動や取り組みから視点を広げ、他の活動団体や世界とのつながりを考えるきっかけを与えられたことがこの結果に結びついたと考えられる。企画に対しての満足度は非常に高かった（図5）。また草津市、滋賀県で最も達成すべきSDGsについて聞いたところ、「14.海の豊かさを守ろう」「4.質の高い教育をみんなに」「11.住み続けられるまちづくりを」の3つが多数を占めた（図6）。滋賀県には琵琶湖があり、環境への意識も高いことや、草津市には立命館大学が立地していることが考えられる。

以上のことから、この企画の参加者が今後もSDGsについての知見を広め、社会に浸透させていく中心的存在となること、またSDGs達成に向けて積極的に取り組んでいくことを期待したい。

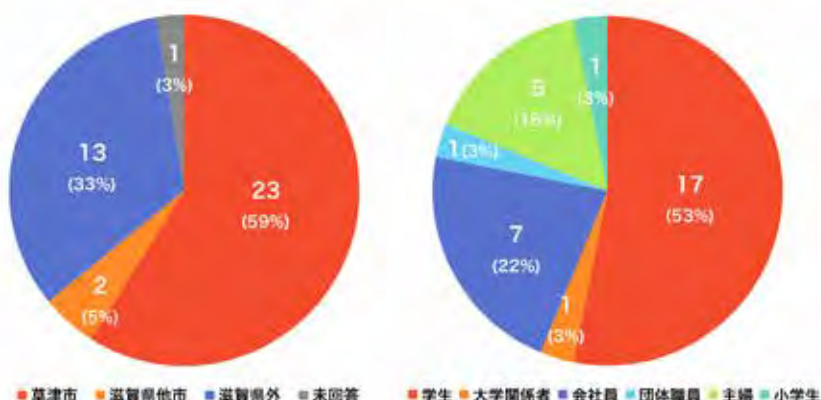


図1 回答者の居住地



図2 回答者の属性

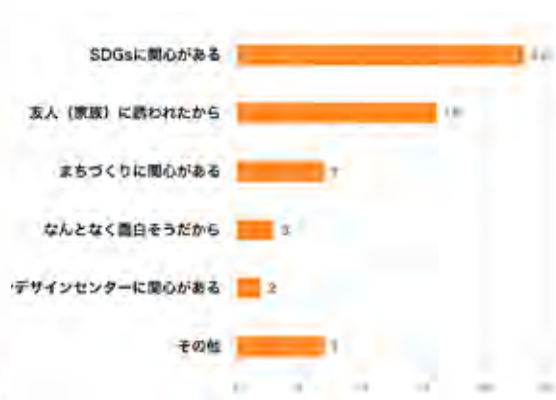


図3 参加動機

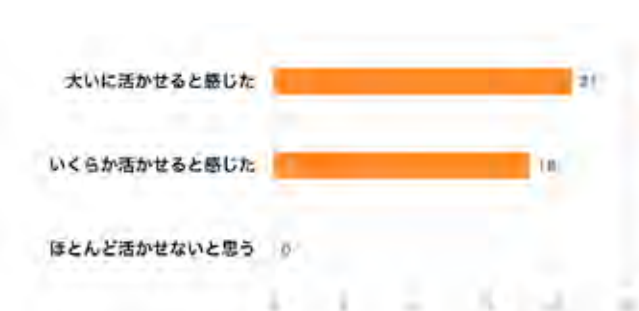


図4 今回の企画が今後の生活に活かせるか

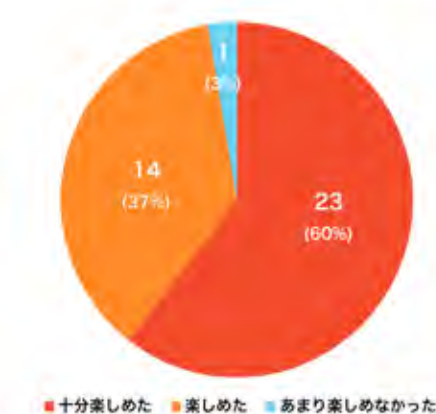


図5 企画満足度



14. 海の豊かさを守ろう (9 人)

「滋賀の命ともいえる琵琶湖を守るのはとても大切なことであるから」
「琵琶湖の環境を大切に！」



11. 住み続けられるまちづくりを (6 人)

「滋賀が良いところであることを色々な視点から考えたい」
「安心して住める街にしたいから」



4. 質の高い教育をみんなに (8 人)

「子どもの未来を一番考えたから」
「大学と市の連携を取れば、もっと子どもに夢を与えられると思う」



10. 人や国の不平等をなくそう (2 人)

「草津市在住の外国人の友人が寂しいと言っていたから」
「日本でも差別にかかわるニュースが報道されているから」

図 6 滋賀県・草津市で達成すべきと思う SDGs とその理由

■企画参加者の声

- ・ごみを資源に廃棄野菜から個食をなくす食堂を作りたい (50 代女性会社員)
- ・子どもを外で遊ばせて、栄養のあるご飯を食べさせて、ゆっくり寝かせて健康に！ (40 代女性主婦)

(3) 調査結果② (「私たちの SDGs」参加者へ実施した、企画実施数か月後の調査)

調査日：11 月 27 日 (月) ～ 12 月 3 日 (日)

回答数：10 件

オンラインによる調査を行ったが、回答していただいた方が非常に少なく、有効な調査結果を得ることができたとはいえなかった。しかし、回答者全員に SDGs を学んでから行動変容が生まれたことが分かった (図 7)。SDGs という一つの世界共通の指標がツールとなって、社会問題への関心と現在の自分が社会に対して起こせるアクションが何かを参加者へ考えるきっかけを与える役割を果たしたといえるだろう。



図 7 ワークショップ参加後の行動の変化について (複数回答可)

Let's Talk About the Future with SDGs

立命館大学 Sustainable Design Lab.

◆企画目的

SDGs について市民に周知し、市民が主体的に SDGs に根ざした行動を滋賀県から世界へ発信し、持続可能なまちづくりを目指す。今回の企画では、留学生や地域に住む外国人居住者を対象に行う。日本人の学生は、意識的に日本人だけでは感じる事ができないことや多様な価値観を学ぶことが必要である。そのために、多文化共生社会のなかで留学生や外国人居住者と日本人学生の交流機会を創出した。今回の企画をきっかけに、あらゆる人々にとって共に未来の社会を考える機会とする。

◆企画詳細

[1]	名称	Let's Talk About the Future with SDGs
[2]	主催	立命館大学 Sustainable Design Lab.
[3]	実施場所	アーバンデザインセンターびわこ・くさつ
[4]	日時	2017 年 11 月 17 日（金） 18 時 30 分～20 時 00 分
[5]	企画内容	・ピックアップされた達成目標に関する身近に感じる問題や課題についてのグループディスカッション ・課題解決に向けて自分たちができることや解決策の発表 6. 安全な水とトイレを世界中に 8. 働きがいも経済成長も 9. 産業と技術革新の基盤をつくろう 15. 陸の豊かさを守ろう Original. 11. 住み続けられる街づくりを×子育ての環境を充実しよう 取り上げた達成目標は日本人があまり感じない課題に絡めたものである。 6 番は顕著で、日本では水道の蛇口をひねると水が当たり前のように出るが、海外では水道の整備がされていないところも多い。8 番に関しては、日本での就職について不安を抱く外国人の方が多いことを耳にしたこと、また留学生の 7 割が日本での就職を希望しながら、就職率が 3 割に留まることから取り上げた。また、オリジナルとして挙げた子育てに関しては、外国人夫婦が日本で子供を産んでも、コミュニティがなく、助けが必要なときも誰に助けを求めればいいのか分からないということがあると聞いた。多文化共生社会の実現に向けては 11 番の目標の実現が不可欠であるとも考えたため、コミットさせた。 日本人と外国人の視点の違いから、多様な意見交換ができると期待された。 ○タイムスケジュール 18:30 イントロダクション「SDGs とは」 18:50 テーマ別ディスカッション 19:30 発表 (1 グループ質疑応答込みで 10 分) 20:00 写真撮影・アンケート記入

◆企画の様子

外国人の留学生と市民、日本人の学生と市民が 6 つのグループに分かれて積極的にディスカッションしていた。外国人と日本人の価値観は異なっており、日本人が普段感じにくい問題意識を持っていた。例えば、中国人の参加者はやさしい日本語でも、「文字はひらがなではなく漢字を使用してもらえるとわかりやすい」といった声があがった。各グループの発表においては、特に「6. 安全な水とトイレを世界中に」をテーマにしたグループ内のウズベキスタン人の女性の方が自国の水問題について、非常に熱く語っていたのが印象的だった。学生も時折英語で市民の方に通訳し、話を聴きながら内容を全員で理解していた。

◆企画風景



◆調査結果

調査日：11月17日（金）

回答数：実施前 /13 件 実施後 /9 件

実施直前のアンケートの回答者は13人（男性6人、女性7人）で、うち外国人は5人（留学生4人、一般市民1人）だった（図8）。出身地は中国が3人、韓国が1人、ウズベキスタンが1人だった。SDGsについて知っている人とそうでない人は半々に分かれたが（図9）、聞いたことがあると回答した人を見ると、ウズベキスタン人の留学生を除くとすべて日本人であった。

また、実施直後のアンケートの回答者は9人（男性5人、女性4人）であった。企画の狙いの一つであったSDGsの理解はほとんどの回答者が「理解できた」と回答した（図10）。また、もう一つの狙いである文化や価値観の多様性を感じることにについて、「感じる事ができた」と回答者全員が回答したことは非常によかった。企画については回答者全員が5段階評価中の3以上であったことから、おおむね好評だったと思われる（図11）。

ただ、実施直前直後どちらもアンケートの母数が少なく、参加者の半数程度しか回答がされなかったことは課題である。

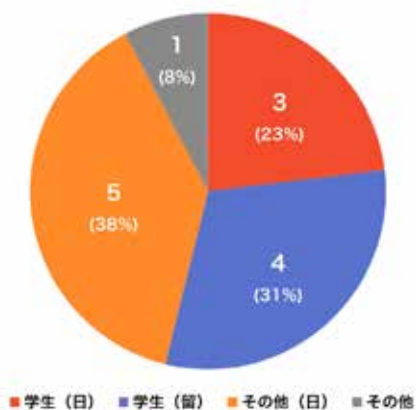


図8 回答者の属性



図9 SDGsについて知っているか（企画前）

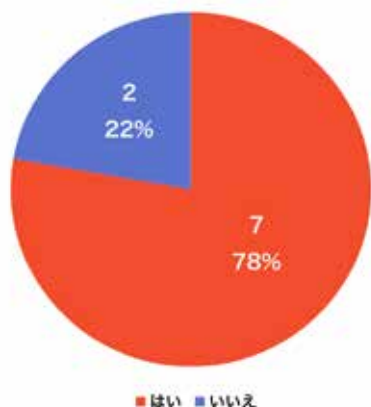


図10 SDGsについての理解を深めることができたか

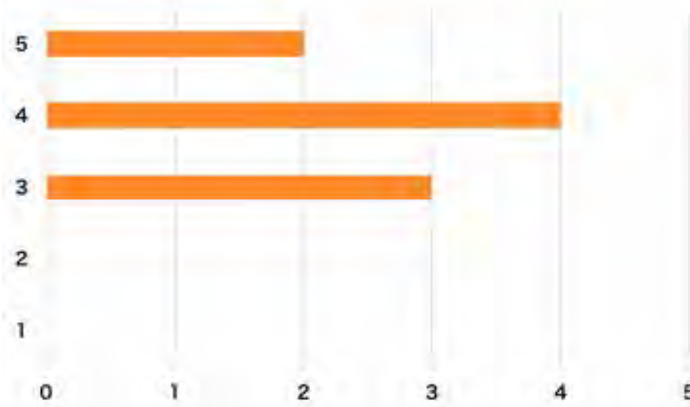


図11 企画満足度（5段階評価）

◆総括

UDCBK で大きく 2 つの企画を実施しましたが、どちらの企画とも参加者には有意義な時間を提供できたと考えています。SDGs やサステナビリティといった、これまで耳慣れなかった言葉が草津市や滋賀県では少し耳にする言葉になったように感じています。もちろん社会全体が SDGs に関心をもつような動きをしていることもありますが、私たちが SDGs を社会・地域に発信していく役割をひとまず果たせたのではないかと思います。さらに、今後 SDGs の考え方をそれぞれの活動にどのように取り入れていくかについても、考え方やその事例を共有する機会を創出していきたいです。また、2018 年 1 月に Sustainable Week 参加団体である SOIL&SOUL が「多世代ボードゲーム交流会」を実施、同じく color-free がセクシャルマイノリティに関するワークショップを UDCBK で実施したことから、学生が今後も UDCBK を積極的に利用するという目的を達成できたといえるでしょう。UDCBK において Sustainable Week 参加団体と市民がコラボする機会ができたことで、SDGs の考え方がさらに浸透し、市民の行動や生活が変容していくのではないのでしょうか。

一方で、市民の行動変容については定性的なことしか把握できておらず、定量的かつ継続的に測定していく必要があります。しかし、アンケート調査では非常に大きな課題が残りました。紙媒体でのアンケート調査は確実性がある一方、企画実施の現場でしか活用できず、企画実施後の参加者の行動変容を見ることはオンラインでの調査に頼らざるを得ませんでした。そして、そのオンラインでの調査において回答が集まらなかったのは、実施時期が遅すぎたことや、回答の催促が不十分であったことが主たる原因であると考えています。加えて、この本事業を実施する目的を参加者へ予め伝えていなかったことも一因かもしれません。また、企画の参加者募集の広告が遅れたことによりうまくいかなかった面もありました。計画に沿って進められなかったことや、計画の段階である程度の遅れを想定して企画に取り掛かるべきだったと感じました。

立命館大学 Sustainable Week 実行委員会 UDCBK 担当
亀石 弥都（スポーツ健康科学部 1 回生）

コラム

誰一人取り残さない SDGs カレー



Sustainable Week2018 では SDGs 体験イベントにて「食」と SDGs を組み合わせたテーマで「誰一人取り残さない SDGs カレー」を開発する予定です。Sustainable Week2017 では、留学生や外国人の方が気軽に参加できる多文化対応の企画がなく、参加者が多くありませんでした。

私たちは、宗教ごとに異なる食事のタブーに着目し、大学に所属する留学生や地域で生活する市民の方に宗教の違いがあったとしても一緒に食べることができる SDGs カレーを作ることを目指します。このカレーを食べることで、一般の方、そして大学の留学生双方に SDGs を啓発していこうと考えています。このイベントを通じて日本在住の外国籍の方も巻き込んだ、誰一人取り残さない SDGs イベントへ発展させていきたいです。

この企画は、2018 年 3 月 11 日に実施された、国連が掲げる「持続可能な開発目標 (SDGs)」の達成に向けて活動する大学生たちを集めたコンテスト「大学 SDGs ACTION! AWARDS」(朝日新聞社主催)にて、グランプリに選ばれました。

平成 29 年度 UDCBK 社会実験事前調査事業 まとめ

2017 年 10 月 1 日から 10 月 6 日に日本初！学生主催による SDGs 体験型イベント「Sustainable Week」が開催されました。このイベントは、SDGs(Sustainable Development Goals)に関心を持つ立命館大学の学生が中心となって始めた取り組みです。しかし、Sustainable Week を開催するにあたって、キャンパスだけではなく、地域を巻き込んだ多様性による社会課題解決の必要性を感じていました。そこで地域と大学の接点となる UDCBK(アーバンデザインセンターびわこ・くさつ)にて、キャンパスでの学生向けイベントで得られた結果(参加者の満足度や SDGs についての理解度など)と市民向けの SDGs 啓発イベントで得られた結果を比較することで、SDGs の浸透度やどのような取り組みが市民や学生の関心や興味を引くのかを明らかにすることを目的にしました。今回、UDCBK 社会実験調査事業の活動報告書を作成するにあたって本事業の成果、反省を報告書としてまとめることで、これから BKC 以外の大学、もしくは、草津市、滋賀県から社会をよりよくするムーブメントが起こることを期待しています。そのために今回、本事業の成功の要因、さらに行政として取り組んで頂きたいことを簡潔にまとめました。

◆ Sustainable Week と UDCBK 社会実験事前調査事業での結果の特徴

- ◆ 両企画とも参加した人たちに対して、SDGs の認知度向上がみられました。
- ◆ Sustainable Week では大学キャンパス、本事業では滋賀県草津市と、参加者にとって身近な場所を議論の題材にしたことが SDGs 理解促進につながりました。
- ◆ 本事業のアンケート調査において、滋賀県あるいは草津市で達成すべき SDGs の目標に「4. 質の高い教育をみんなに」と「11. 住み続けられるまちづくりを」が挙げられました。また、Sustainable Week の事後アンケート調査からも大学や地域など身近な問題と SDGs へのつながりに対する関心は非常に高いという結果がありました。

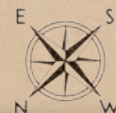
◆ SDGs を取り入れた持続可能なまちづくりを実現するために

- ① 産官学連携を強化し、SDGs 推進協同プロジェクトの立ち上げ
- ② まちづくりとコミュニティ形成拠点として、UDCBK の認知拡大と利用促進
- ③ 下宿生・留学生と市民の積極的交流を図り、ダイバーシティに富んだ社会の実現

- ① SDGs を市民社会へ根付かせていくには、大学と行政(草津市)が協働して実施した本事業だけでなく、企業も巻き込んでより身近に誰もが SDGs を意識して行動することが必要であると感じました。本企画参加者の多くは学生や主婦でしたが、技術・専門知識を持つ企業の会社員の方が参加することで、社会に一層浸透させられるであると考えました。
- ② 「11. 住み続けられるまちづくりを」「17. パートナリーシップで目標を達成しよう」と2つの目標の達成を市民は行政に求めています。アンケートの中で、草津市が達成すべき SDGs のひとつに 11 番があげられており、その達成に向けては 17 番の達成も必要であることから、人と人がつながる場所である UDCBK をさらに活用していくことが必要だと感じました。
- ③ 11 月に開催した企画で留学生と市民、日本人学生が、文化や価値観の違いを越えて SDGs についてディスカッションをした時間は大変有意義なものでした。「10. 人や国の不平等をなくそう」とあるように、異国間の異文化交流が互いの相互理解と友好をもたらし、「16. 平和と公正をすべての人に」の実現に寄与できると考えられます。

実際に、これまで活動を行ってきた中で私たちが切実に感じた課題を踏まえ、これからの草津市が SDGs に取り組むきっかけになるのではないかと思います。これからの未来を生きる学生から提言を行政の取り組みの1つとして受け止めて頂けましたら幸いです。

GUIDE MAP 企画のご案内



シェアアップ

立命館のサークルの情報を
閲覧できるアプリ

日時 | 10/1~ アプリ配信開始
主催 | watnow



ゴミ箱アート

ゴミ箱のリノベーション

日時 | 常設
主催 | 劇団月光斜 teamBKC



ユニオンスクエア



満腹で幸せに！

~ cooking of merci ~

旬の野菜を使用した料理提供

日時 | 10/4,5 9:00~13:00
主催 | merci



第1 または



空を感じよ

~熱気球搭乗体験型学習

気球搭乗体験型学習

日時 | 10/2~5

主催 | ダンデライオン

※HP にて事前予約必

トリシア



ZEH に住もう



ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス

日時 | 10/5,6 13:00~16:00

主催 | EMH プロジェクト

トリシア

コアステーション

セントラル
サーカス

メディアセンター

ユニオンスク

キャンピー

バスのりば

シー
キューブ

クインス

噴水前



再生可能エネルギーライブ



再生可能エネルギーの紹介、
バトンリレー式合同ライブ、
カラーバルーンと演奏を組み合わせたイベント

日時 | 10/2~6 12:10~13:00

※雨天時 (10/4,5,6) セントラルアーク

主催 | アコースティックギターサークル

song-genics/LUSTER



防災の秋



起震車体験

日時 | 10/2 13:00~

主催 | IVUSA 京都



スポーツ健康コモンズ



運動フェスティバル



スポーツやエクササイズの入門
レッスン

日時 | 10/1 11:00~16:00

★同時開催企画



Health Week

~週慣化して健康に



筋力トレーニングなどの運動指導

日時 | 10/2~6 8:00~8:30

主催 | FB+1



Technology を
体感しよう



ロボコン観戦・機体操作体験

日時 | 10/2,3 16:30~18:00

主催 | ロボット技術研究会



BKC スポーツ
健康コモンズ

正門

クインススタ



空を感じよ

~熱気球搭乗体験型学習

気球搭乗体験型学習

日時 | 10/1 8:00~9

主催 | ダンデライオン

※HP にて事前予約必

エポック



世界報道

「世界報道写真

入賞した作品

日時 | 10/1

主催 | 国際平

※参観料有

は第3グラウンド

「空を感じよう」
搭乗体験 ~
学習
8:00~9:00
イオン
予約必要



プリズムハウス

受付

セントラルアーク

エア

アクロスウィング

エポック
立命 21

スタジアム

ジアム

う
本験 ~

9:00

要

立命 21

道写真展 2017

真コンテスト」で
を展示

9:30~16:30

和ミュージアム

★同時開催企画



セントラルアーク

◆期間中受付はこちら



5 BKC- バルーンに気持ちを
込めようキャンペーン -

バルーンリリース

日時 | 10/1~5 常設
10/6 11:30~12:30
主催 | color-free



9 Sharing Basement Project

英語のプレゼンテーション大会

ロボットの技術体験

日時 | 10/1 13:00~16:30
主催 | STEP、ロボット技術研究会



4 満天の星を体験しよう

プラネタリウム

日時 | 10/1 13:40~16:30
10/3,4 16:30~18:30
主催 | 草津天文研究会



8 学生よ、大志をいだけ
一学べ、起業家精神 -

ベンチャー企業の社長による講演

日時 | 10/2,3 12:00~13:00
主催 | BKC インキュベータ
インターン生 23~27 期



10 Refugee Dining

在日難民の故郷の料理提供、
テント体験、難民キャンプの写真展示

日時 | 10/4 11:00~17:00
主催 | PASTEL



17 SOIL&SOUL PROJECT

Sustainable Week 参加団体
によるプレゼン

日時 | 10/5,6 15:00~19:00
主催 | SOIL&SOUL



6 “水” から生活を
考えよう

水質に関する研究ポスター掲示

日時 | 10/1~6 常設
主催 | 理工学部環境システム工学科



14 BKC Aquarium

海ごみの現状、生態系の豊かさ、
魅力を知る

日時 | 10/1 13:40~16:30
主催 | Dive In Blue



2 0円食堂

0円カレーと Ritree が作った野菜の
提供、農家へのインタビュー PV 放映

日時 | 10/2,3 13:00~17:00
主催 | Reco.lab/Ritree



11 防災の秋

AED スタンブラリー、包帯法

日時 | 10/3 13:00~15:00
主催 | IVUSA 京都



14 外来種を喰らえ

外来魚の調理・提供

日時 | 10/5,6 11:00~15:00
主催 | haconiwa



アイコンの説明



学ぶ



食べる



体験する

- ◆「空を感じよう」「Refugee Dining」「外来種を喰らえ」は有料です。
 - ◆「世界報道写真展 2017」は参観料がかかります。
 - ◆企画内容などは変更となる可能性があります。
 - ◆雨天の場合に開催場所が変更となる企画があります。
- 詳しくはホームページをご覧ください。

▶お問い合わせ sustainableweek@gmail.com

2017 年度 活動報告書

はじめよう、僕らの未来デザイン

2018 年 4 月 1 日 第 1 刷発行

著者 立命館大学 Sustainable Design Lab. / 立命館大学 Sustainable Week 実行委員会
編集者 上田 隼也 (立命館大学 生命科学部 4 回生)
渡邊 里々子 (立命館大学 理工学部 3 回生)
戸簾 隼人 (立命館大学 生命科学部 2 回生)
亀石 弥都 (立命館大学 スポーツ健康科学部 1 回生)
発行者 立命館大学 Sustainable Design Lab.
〒 525-8577 滋賀県草津市野路東 1 - 1 - 1
<https://www.sustainableweek-rits.com>

本書に掲載されている所属及び役職は 2018 年 3 月時点のものです。
この報告書に関するご意見・ご感想をメールでお寄せいただく場合は sw-leaders@edge-sprout.com まで。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
無断複写・無断転載を禁じます。

NO POVERTY

ZERO HUNGER

GOOD HEALTH AND WELL-BEING

QUALITY EDUCATION

GENDER EQUALITY

CLEAN WATER AND SANITATION

AFFORDABLE AND CLEAN ENERGY

DECENT WORK AND ECONOMIC GROWTH

INDUSTRY, INNOVATION AND INFRASTRUCTURE

REDUCED INEQUALITIES

SUSTAINABLE CITIES AND COMMUNITIES

RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION

CLIMATE ACTION

LIFE BELOW WATER

LIFE ON LAND

PEACE, JUSTICE AND STRONG INSTITUTIONS

PARTNERSHIPS FOR THE GOALS



◇Sustainable Design Lab. は平成 29 年度 UDCBK 社会実験事前調査事業 委託団体です。

◇Sustainable Week 実行委員会は 2017 年度学びのコミュニティ集団形成助成金 採用団体です。